

令和5年度

実践記録集

秋田市立御所野学院高等学校

御所野学院高等学校実践記録集 目次

巻頭言

校 長 神田 瑞穂	3
-----------	---

I 授業実践

1 教科指導

国語科	4
地歴・公民科	6
数学科	8
理科	10
英語科	12
芸術科 音楽	15
芸術科 美術	16
芸術科 書道	17
保健体育科	18
家庭科	19
情報科	20

2 授業研修

指導主事等計画訪問	22
授業アンケート結果	47

3 各種研修

実践の指導力向上研修講座	50
--------------	----

4 郷土学・表現科

郷土学	52
表現科	54

Ⅱ 各分掌実践

総務部	56
教務部	57
研修部	58
生徒指導部	59
特別活動部	60
図書部	61
情報部	62
保健部	63
1 年部	64
2 年部	66
3 年部	68

Ⅲ 進路指導

進路指導部	71
-------	----

学び続ける教師を目指して

秋田市立御所野学院高等学校

校長 神田 瑞穂

この度、本校の教職員が実施した研修等の内容をまとめた実践記録集が完成いたしました。本記録集は、それぞれの活動や研修の目的、内容、成果を広く公開し、今後の学校教育の改善に役立てることを目的としております。

ここ数年間において、社会情勢や新学習指導要領実施など教育を取り巻く環境が大きく変化しています。このような状況の中、本校では、生徒一人一人が、変化に対応し、自ら考え行動する力を身に付けることができるよう教育活動に取り組んでまいりました。研修においても、これからの課題に対応するために、教職員が日頃の教育活動の振り返りを行い、新たな取組について検討する機会を設けています。教育の最新動向や実践的な指導方法について学び、教職員の間で意見交換を行いました。

研修に参加した教職員は、日頃の業務に忙殺されながらも、研修に真摯に取り組み、教職員の意識やスキルが向上し、学校教育の質の向上につながっていると感じています。

学習指導においては、新学習指導要領の実施2年目となり、その理解や様々な課題について、教職員が意見を交わしながら学びを深めました。また、生徒の興味・関心を高め、主体的な学びを促すために、様々な学習活動を展開しました。生徒の学力向上を図ることを第一に考え、一人一人の学習の理解度や進度に応じた指導を行っています。

教員の資質向上においては、教職員一人一人が、常に自己研鑽に励み、より良い教育を実現するために、努力を続けています。また、教職員間の連携を深め、チームで教育活動を進めていくことを大切にしています。生徒が、自分の可能性を最大限に伸ばし、社会に貢献できる人材となることを目指して、教育活動を展開しています。

本校では、「校内研究授業」「保護者アンケート」並びに「生徒による授業アンケート」等を行い、その結果を受けながら、それぞれの教員は授業の改善に努めています。特に、実践的な指導力の向上・改善については、日常的に自分の授業を開放し、自分と同じ教科の教員による観察を得ながら改善を進めること、自分とは異なる教科・科目の教員の視点を取り入れて工夫を重ねることなど、今後もできることはたくさんあるように思います。まずは、教科内で、そして学年・学校全体で組織的に取り組み、それぞれの指導力の向上に努めたいものと考えます。

また、今年度の研修を通して、教職員一同、より良い教育を実現するために、新たな気付きや学びを得ることができたと思います。今後も、生徒一人一人の成長を支援するために、教職員一同、日々研鑽に励んでまいります。

この実践記録集には、研究授業・協議会の記録以外にも、校内・校外研修の記録などが載っています。大切なのは、この記録集をいかに活用していくか、ということです。この巻頭言以降の次ページからはじっくり読んで、自己研修あるいは学校運営等の改善に向けての提言などに役立てていただければ幸いです。また、本校以外の皆様からも忌憚のないご意見・ご感想を賜ることができれば大変ありがたいと願うものであります。

最後になりましたが、このたび執筆・編集を担当された皆様に心から敬意と感謝の意を表します。ありがとうございました。

国 語 科

1 目 標

対話を通して、視野を広げ考えを深めていくことのできる生徒の育成

2 重点事項

- (1) 主体的に課題解決できるような発問や課題の工夫
- (2) 基礎・基本事項の定着を目指した学習指導
- (3) 身につけさせたい力を明確にした、適切な言語活動の設定

3 今年度の実践

- (1) 主体的に課題解決できるような発問や課題の工夫
 - ① 教材の裏に広がる背景や関連事項に触れることで、多角的な視点で作品を読み取り、深い理解につながるように工夫を行った。
 - ② 問いに対して常に「理由」や「根拠」を含めて説明させることで、自らの思考を整理し論理的な解答を導き出すことができるよう指導した。
 - ② 学習活動の成果を発表したり廊下や教室に掲示 したりすることにより、学びの共有化を図った。
 - ③ 定期考査に合わせた授業計画を提示し、単元ごとの学習目標や到達目標を明確化することで家庭学習等での自学がスムーズにいくよう配慮した。
- (2) 基礎・基本事項の定着
 - ① 範囲を示し、漢字や古文単語の小テストを定期的に行った。この実施により、提示された範囲を基に計画的に学習する力の育成と誤解答の見直しおよび訂正による基礎知識の定着を図った。
 - ② 週末課題や長期休業中の課題を設定し、家庭での学習習慣の確立を目指した。また、課題は休み明けテストや定期考査の範囲とし、生徒の理解度の確認を行った。
 - ③ 希望者に対して、現古漢の添削指導を実施。個々の能力の向上に努めた。
- (3) 身につけさせたい力を明確にした、適切な言語活動の設定
 - ① グループワークを通して他者と意見交換をすることで、多角的な視点でものごとをとらえ考えを深める態度を養わせた。
 - ② 発表の場面を多く設定し、より効果的に伝えるための表現や言葉の選び方を工夫させた。
 - ③ タブレットのアンケート機能やホワイトボード機能を活用し、発表に自信のない生徒でも意見を表明できるよう配慮した。

4 成果と課題

<成果>

(1) 情報活用能力および発表力の向上

情報活用能力の向上に伴って、発表力、特にプレゼンテーション能力が格段に向上した。タブレットでインターネット検索をする能力が高くなり、様々な情報を大量に、しかも瞬時に得ることができるようになったことから、多くの生徒が自分にとって必要な情報を適切に抜き出すことができるようになった。これにより、他者を意識したプレゼンテーションの構成を作ることが容易となり、非常に見やすく分かりやすいプレゼンテーションの作成が可能となった。これまではスライドと発表原稿が同じということが多々あったが、その点においても他者からのアドバイスを反映させることによってかなり改善されてきている。

(2) 基礎力の定着

漢字や古文単語を始めとする小テストの実施により基礎的知識の定着が見られ、模試等の得点率アップにつながった。

(3) 計画的な学習への取り組み

授業で扱う単元の内容や学習目標、おおよその配当時間を随時提示することで、予習などの自宅学習でも、目当てをもって効率的に取り組ませることができた。

<課題>

(1) 思考の深化

発表の機会が増えたことに伴い、相互評価の場面も多くなっている。見たり聞いたりしたことの表面的な評価は大部分の生徒ができるものの、発表内容についての評価をできる生徒は少ない。他者の発表内容を自分の中に落とし込み、新たな問いをもってさらに深く掘り下げていくことができないため、自ずと質疑応答の時間は空疎なものとなる。これは発表だけに限らず、文章を読む際にも同じことが言える。他者の意見から問いを見つけるためには、ある程度の知識と経験が必要である。しかしながら、身の回りに大量の情報が渦巻いているにもかかわらず、自らが好む情報しか受け付けられない生徒に、どのようにして興味をもたせ、知識と疑似経験をもたせたらよいのか。今後の大きな課題である。

(2) 基礎学力の向上

基礎学力に不安を抱える生徒が多く、中学校段階までの学習内容の学び直しの必要性も感じている。様々な手立てのもとに繰り返し学習をさせているが、定着しない生徒も少なくない。基礎基本を見直し、今後とも各年次での学習事項の定着を図っていきたい。

(3) 新課程への対応について

昨年度に引き続き、新しい科目、新しい評価法の実施に苦慮している。どのように運営および実施をしていけば生徒にとって効果的な指導になるのかを常に念頭に置きつつ、今後も教科内で協議を重ね、より適切なものにしていきたいと考えている。

地 歴 公 民 科

1 目 標

社会的事象に対する興味・関心を高め、自ら問いを解決しようとする生徒の育成

2 重点事項

(1) 主体的に学ぶための手立て

- ①新聞記事やニュースなどを活用し、切実性のある教材開発を行い、生徒が興味・関心をもてる授業を構成する。
- ②社会的事象に対する自分の意見をまとめる時間を確保し、発表の場を保証する。
- ③生徒の発言や考えを生かした授業を展開する。
- ④自分の考えが広がったり深まったりしたことや、身に付いた力を実感できるような振り返りの場を設定する。

(2) 基礎・基本を身に付けるための手立て

- ①基本的な用語を理解することができるようなノート作りの工夫を促す。
- ②テストを通して、基礎・基本の定着を確認し、不足している場合は補充学習を行う。
- ③個にあった学習の仕方について支援・助言する。

(3) 深い学びを実現するための手立て

- ①グループワークなどの学び合いを通して、社会的事象を自分の言葉で説明し、表現する力を高める。
- ②他教科で身に付けた知識などを活用して、教科横断的な学習を展開する。

3 今年度の実践

(1) 主体的に学ぶための手立て

- ①タブレットや資料、史料等を活用して調べ、歴史的事象の背景などを考察する活動を通して主体的に学び、理解を深めることができた。
- ②調べたこと、気付いたこと、考察したことを発表させて、他者の意見に触れることを通して主体的に学び、理解を深めることができた。

(2) 基礎・基本を定着させるための手立て

- ①授業の導入や振り返り時に、タブレットを活用した小テストを実施した。また、この小テストをプリントにして定期考査前に取り組ませることによって基礎・基本の定着を図った。
- ②歴史の流れや要点を整理したり、発展問題を解いたりする時間を確保して復習に取り組ませた。

(3) 深い学びを実現するための手立て

教科書や資料集に掲載されていない資料をタブレットやプロジェクタを活用して提示、考察させることで、黒板とチョークを使った授業より深い学びができた。授業の振り返り時にタブレットを活用することで、生徒に合った個別対応ができた。

4 成果と課題

< 成果 >

問題演習の機会を増やすことによって基礎的な知識の定着は図ることができた。また、復習や調べ学習にタブレットを活用したり、話し合ったりする場面を作ることにより、授業に主体的に参加する生徒が増えた。

< 課題 >

プロジェクタやタブレットを授業で積極的に活用した。資料の提示・動画視聴で生徒の興味・関心を引き出すだけでなく、板書・調べ学習・復習・発表などでも活用している。今後は生徒の実態をふまえ、どのような教育的効果があるか、授業のどの場面でとりあげたらより効果的かを検証し改善を加えていく必要があると考える。



< 研究授業「地理総合」 >



< 御所野学院中 体験授業 >



数 学 科

1 目 標

事象を数理的に考え、表現できる生徒の育成

2 重点事項

- (1) 主体的に学ぶための手立て
- (2) 思考力、表現力を養うための手立て
- (3) 深い学びを実現するための手立て

3 今年度の実践

(1) 主体的に学ぶための手立て

- ① 1年生の数学Ⅰの授業において、習熟度別による少人数授業を実施した。標準2クラス、発展1クラスの計3クラスで、それぞれ到達目標を設定し、特に標準クラスでは基本事項の反復演習に重点を置き、学習内容の習熟を図った。

また、定期考査ごとにクラスのメンバーを入れ替え、生徒の学習意欲を喚起した。発展クラスでは応用・発展的内容にも積極的に挑戦し、大学入試を意識した授業を展開した。

- ② 各学年で「小テスト」や「確認テスト」を実施することで確認事項や単元の総復習を行った。家庭学習の習慣を付けるねらいもあり、計画的にテストを実施し、生徒が自主的に学習できる環境を整えた。
- ③ 朝学習を実施し、SHRが始まるまでの時間に基本問題を中心としたプリントによる演習を行った。さらに、放課後講座や添削をするなど、模擬試験や共通テストに向けた演習で基礎学力の底上げを図った。また、進路志望が多岐に渡るため、大学受験者に対しては個別指導を行い受験に対応できる学力を培った。
- ④ 1年生の授業で振り返りシートを活用し、毎時間わかったことや大事なポイント、疑問に思ったことなどを書かせる活動を行った。本時の目標が明確になり、わかったことや疑問点をことばで表現することで、次の授業へつながる主体的な活動となった。

(2) 思考力、表現力を養うための手立て

データの分析などの図や表を使う授業では、プロジェクターを多用し図や表を映し出して授業を行った。そのため、比較や分析などの思考を深める活動時間を多くとることができたり、図や表をそのまま使って説明させたりすることができ、思考力、表現力の育成に繋がった。

(3) 深い学びを実現するための手立て

コロナ前のように、グループ活動や互いに教え合う活動を計画的に取り入れて授業を展開した。特に1年生や2年文系のクラスでは、他のグループの発表を見たりお互いに教え合ったりすることで新たな発想や展開につながることもあり、効果的な活動ができた。

4 成果と課題

<成果>

1年生の数学Ⅰで習熟度別学習を行っているため、それぞれのクラスで適切な到達目標を設定し授業を進めることができた。力のある生徒を更に伸ばし、苦手な生徒には基本事項を徹底させることで、全体の底上げに繋がった。また、定期考査だけではなく、小テストや確認テストを定期的の実施することにより、家庭学習の質を向上させることができた。

また、今年度はグループ活動なども取り入れて授業を展開することができた。お互いに教え合う活動などは、数学を苦手としている生徒も積極的に取り組む様子が見られ、数学に対する意欲や、学習する意義を改めて感じさせることができた。

<課題>

昨年度よりはグループ活動などを多く取り入れ授業を展開することができたが、内容的にはまだまだ工夫の余地があるように感じる。タブレットの使い方を含め、生徒が数学の授業に興味・関心をもつことができるように、扱う題材や教具の工夫、グループ形態の研究などにより一層授業改善に取り組みたい。

数学を苦手とする生徒に対しては、小学校、中学校の内容の学び直しが必要であり、放課後や長期休業を利用し、個別に指導する時間をとるようにしたい。



<グループ学習の様子>

理 科

1 目 標

自然に対する探究心を高め、自らの考えを深めていくことのできる生徒の育成

2 重点事項

- (1) 主体的に学ぶための手立て
- (2) 基礎・基本を身に付けるための手立て
- (3) 深い学びを実現するための手立て

3 今年度の実践

○物理基礎・物理

- (1) 教科書準拠の予習プリントを授業実施前に配付し、事前に学習内容を確認させた。法則等を実感できるよう、各単元で演示実験、生徒実験を実施した。成果として、物理現象に興味を持ち、主体的に学習に取り組むようになった。
- (2) グループで協力しながら演習問題を解答し、発表する機会を多く設けた。成果として、基礎・基本が定着し、定期考査等の成績が向上した。コミュニケーション能力の向上もみられた。
- (3) 課題として、入試や模擬試験のような、応用力を必要とする問題を解答する能力が不足している。現象を深く捉え、幅広い知識を利用して総合的に思考する力はまだ十分とはいえない。

○化学基礎・化学

- (1) 学習目標を提示する際に、既習事項や日常の科学的現象との繋がりを伝えて、生徒が興味関心をもって学習に向かえるようにした。また、個々の理解度を演習や小テストで確認し、わかったという達成感から自ら学ぼうとする意欲に繋げるようにした。
- (2) 小テストを実施した。定着度の低い生徒には再テストや考査前に補習を行なって基礎基本の定着に努めた。また、演習問題に一人で取り組む時間を確保した後に、協働で解く時間をもつことで、苦手な生徒も諦めずに取り組み、基礎的な内容を定着させることができた。
- (3) 生徒実験において、提示した手順通りに操作をして法則性を見いだしたり物質の性質を確認したりする実験の他に、課題に対して、生徒が計画を立てて取り組む実験も取り入れた。目的意識をもって取り組むと同時に、深い考察に繋がった。

○生物基礎・生物

- (1) 授業の導入で日常生活と関連した話や発問を投げかけたりして考えさせる場をつくることを意識した。投げかけた発問を理解できるよう順序立てて授業を展開することを心がけた。授業の終わりには振り返りシートを記入させ、それを授業に反映させた。
- (2) 授業内で問題演習に取り組ませた。一問一答のような基礎の定着を図る問題から、大学入試を意識した記述問題や考察問題にも取り組んだ。また、週に1度のペースで小テストも実施した。生徒の学力差が大きく、きめ細やかな指導がより一層必要であると感じる。

- (3) 深い学びを実現するためには生徒の興味関心が必要不可欠だと考え、実験・観察を積極的に取り入れた。ICT を活用し、生徒同士で結果を共有できるよう工夫した。今後は、得られた結果から自身で新たな問いを見いだせるよう適切な助言を意識したい。

○地学基礎

- (1) 天候、地震、津波、宇宙など日常のニュースで取り上げられたホットな話題やトピックを教材化して伝え、興味関心の喚起に努めた。
- (2) 授業プリントの上段を黒板の板書を記録するスペースに、またの下部分を教科書の重要語句等を確認する穴埋め欄を作成した。
- (3) 発問の工夫に努め、思考を促した。また、授業プリントと授業内容の説明スライドを閉じたファイルが1年間の学びを記録したポートフォリオになるように設定した。

4 成果と課題

<成果>

各科目において、実験や日常生活と関連した話題を取り上げるなど、主体的に学ぶ手立てを行ったことで、興味関心を高めることができた。日常の現象を学習したことと関連させて、分析しようとする意識も芽生えてきている。課題を解決するため、積極的に質問に来る生徒が増えて、主体的に学ぶ姿勢が向上してきている。

また、小テストの実施や授業プリントの工夫、グループ活動を行うことで、基礎基本を定着させることができた。

<課題>

学力差が大きく、授業の焦点が絞りにくい。計算力をはじめとした、数学的な処理能力が極端に低下している生徒が増えてきている。様々な学力層の生徒に対して、しっかりと基礎基本を定着させるために、個々の生徒に合わせたより細やかな指導が必要である。

さらに、限られた授業時間の中で思考力を問う問題や応用力が必要な問題に対応できる力を付けさせる必要があり、教材を精選し、深い学びになるように今後も授業改善に努めていきたい。

英 語 科

1 目 標

主体的に学び実践的なコミュニケーション能力を身につける生徒の育成

2 重点事項

- (1) 基礎・基本の徹底を図る指導方法の工夫
- (2) 発達段階に応じたコミュニケーション能力の育成を目指す指導方法の工夫
- (3) 生徒の授業評価・授業研修を生かしての授業改善

3 今年度の実践

- (1) 基礎・基本の徹底を図る指導方法の工夫

最初の授業で授業の受け方，ノートを取り方，週末課題などの課題提出についての指導を行った。考査毎にノートやファイル，ワークブックのチェック，及びパフォーマンステストをしながら生徒の到達状況を確認し，個々に応じて学習方法の指導をした。

1年生には語彙と文法の定着を目的として毎週単語テストと英作文テスト，または中学校の振り返りテストを実施した。年度途中で単語テキストを1回終了させて，二巡目に突入している。単語テストは google form で実施することで，結果がすぐに生徒にフィードバックでき，かつ教員間でも結果を簡単に共有できるようになった。何度も繰り返し学習することで確実に英語力の向上が見られた。

2年生には昨年度と同様毎週単語テストと，英作文テストを実施した。英単語テストで使用しているテキストが年度途中で終了し，二巡目に突入している。二巡目では google form を活用している。英作文テストに関しては取り組みに差が生じたが，頑張った分だけの成果を残すことができた生徒も多かった。

3年生はスクランブル英文法を用いた小テストを継続して実施した。進路希望に応じた個別指導を行うことで進路目標達成に意欲的に取り組むようになった。

- (2) 発達段階に応じたコミュニケーション能力の育成を目指す指導方法の工夫

1年生では英コミⅠ，論理・表現Ⅰの授業で，2年生では文系英コミⅡ，論理・表現Ⅱの授業で習熟度クラス展開の授業を行った。1年生では定期考査ごとに，2年生では論理・表現Ⅱにおいて後期にクラス替えをした。上位層のクラスでは受験も意識して，教科書の内容だけでなく発展的な内容にも触れた。中位層のクラスには基礎基本の徹底のために反復指導を繰り返し行った。

3年生では進路希望別にクラスを分け，共通テストや私立大学受験予定者にはできるだけ多くの問題を解かせることで入試に直結する実力の向上につなげた。

どの学年もパフォーマンステストをレッスン毎，定期考査毎に取り入れ，生徒のコミュニケーション能力を伸ばしてきた。ALTのテッド先生もパフォーマンステストの原稿添削に協力し，実際にテッド先生が3段階の評価をすることで，生徒たちはよい刺激を受け，さらなる向上を目指すことができた。

成績上位の生徒や，大学入試等でディスカッションやディベートを必要とする生徒を対象に放課後練習会の計画を立てたが，参加者がなかなか集まらなく，実施するのが困難になった。それでも年度後半からは自分から進んで練習したいと申し出てきた生徒もあり，

テッド先生の協力のもとで何度か練習会を実施できた。

本校の特色である Goshono Project を2回実施した。2回目では1年生は自己紹介と秋田のおすすめスポットを、2年生は自己紹介と自分が過去に経験した My ~ day（私の～な日）についてタブレットを用いて国際教養大学の学生たちにプレゼンテーションの形で披露し、その後質問などのやりとりをした。学生たちや国際教養大学の教員から過大なお褒めの言葉をいただき、生徒たちも達成感を味わうとともに、英語学習へのモチベーション向上につながった。

英検対策として受験希望者の作文や面接指導を個別に行い、指導に従い熱心に取り組んだ生徒はその努力に見合うだけの結果を残すことができた。

(3) 生徒の授業評価・授業研修を生かしての授業改善

年2回実施される生徒による授業評価を各自で検証し、授業改善に生かしてきた。

11月市教委訪問の際の研究授業では、非言語コミュニケーションをテーマにペアワークやグループワークを中心に、生徒が主体的に行動する授業を展開した。教員がタイマーを用いてテンポよく授業を展開している様子や、生徒たちが生き生きと英語を自由に用いてコミュニケーションをしている様子を見ることができた。また、非言語コミュニケーションの目的についても考えさせる活動を取り入れ、「主体的・対話的・深い学び」を実現した授業内容に、参観者も学ぶことの多い時間を過ごすことができた。

夏季休業中に English Village を国際教養大学で2泊3日の日程で行った。高校側は1年生2名、2年生5名と参加者が少なかったが、参加した生徒たちからは、「学生と交流するうちに雰囲気にも慣れ、楽しく活動することができた、自分の英語が通じたことで満足感や達成感が得られた、来年も必ず参加したい」等の声が寄せられ、実施してよかったと感じている。

また、我々教員側も学生や教授の指導を実際に参観したことが、今後の指導にあたっの大きな収穫となった。

<成果>

どの学年も学力層に幅があり授業の展開が難しかったが、生徒の状況を把握し、個別指導を行ってきた。教科担任間で生徒の状況や授業の進捗を確認し、柔軟に対応をしてきた。ペアワークやグループワーク、パフォーマンステストの回数を増やし、内容を工夫することでインプットだけでなく、アウトプットにつながる授業を各自で行うことができた。生徒たちも少しずつ自分から英語で発信する態度が身についてきた。

タブレットの操作にだいぶ慣れ、スライドを活用して上手にプレゼンテーションができる生徒が増えてきた。

<課題>

進学を希望している生徒の方が多いが、早期から目標設定をして、自ら課題を見つけて取り組む意識が低いように感じられる。基礎基本の定着を踏まえたうえで、進路目標実現のために何をすべきかを他の教員と連携を密にしながら、明確にさせていきたい。

提出物については、締め切りがルーズな生徒やまったく提出しない生徒が固定化されている。内容の精選に努めるとともに、提出物を出すことの意義を理解させなければならない。

観点別評価については、各学年の主担当が案を出しているが、教科内で評価項目や評価の仕方も含めて話し合いをしながら評価していきたい、

タブレットの導入により、ライティングの際に翻訳機能に依存している生徒がいる。翻訳機能に頼ることなく、自己表現力や思考力を高めていけるよう指導していきたい。



(第2回 Goshono Project より。左1年生，右2年生)

芸術科 音楽

1 目 標

音楽の持つ豊かな表現力を感じ取り、感性を導き出す生徒の育成

2 重点事項（音楽Ⅰ，音楽Ⅱ共通）

- (1) 主体的な学習態度を形成するための工夫
- (2) 表現力と読譜力向上のための手立て
- (3) 深い学びを実現するための手立て

3 今年度の実践

- (1) 主体的な学習態度を形成するための工夫
 - ① ドイツ歌曲・イタリア歌曲などの歌唱に取り組み、外国作品への関心を導き出す。
 - ② 器楽や歌唱の学習では、授業内で発表会を実施した。楽曲選択はジャンルを問わず、個性を生かした発表ができるように配慮した。
 - ③ あらゆるジャンルの鑑賞用資料の拡充・活用を図り、表現意欲につながる工夫をする。
- (2) 表現力と読譜力向上のための手立て
 - ① 楽曲に応じた発音・発声法・演奏法の習得を目指し、コンコーネによるリズム唱、階名唱の実施。
 - ② ソルフェージュ力や読譜力向上のために聴音を積極的に取り入れた。
- (3) 深い学びを実現するための手立て
 - ① 学習シートやレポートを活用し、作品の特徴や持ち味をより深く研究した。
 - ② 歌唱や器楽の学習成果を発表する場を設定し、音楽が持つ可能性と感動を共有した。

4 成果と課題

<成果>

歌唱を得意とする生徒が多いことから、アカペラの混声四部合唱「おんがく」に挑戦し、ハーモニーが確立される過程を楽しみながら、一步踏み込んだ難しい楽曲を歌うことで歌う喜びを味わうことができた。音楽の基礎力をつけるため、聴音などのソルフェージュ課題を取り入れた。またパフォーマンステストを実施し、個々の技術の向上や、演奏の質を高めようとする姿勢に対して大きく影響したように感じられ、自己表現の向上にもつながった。

<課題>

音楽の基礎力が身についていない生徒が多く、新曲をこなすために時間がかかる傾向がみられた。その為ソルフェージュの時間を多く取ることにより読譜力をつける時間が必要となった。また自己表現力を付けるためにも、一人一人への声掛けをより心掛け、より多くの作品にふれることができるよう、音楽全般の情報をあらゆる方面から得る準備が必要となり、生活に密着した音楽を提供できる工夫が重要とされるため音響設備の充実は必須とされる。

芸術科 美術

1 目標

主体的に表現活動に取り組み、自分の思いを追求する生徒の育成

2 重点事項

- (1) 主体的に学ぶための手立て
- (2) 基礎・基本を身に付けるための手立て
- (3) 深い学びを実現するための手立て

3 今年度の実践

- (1) 主体的に学ぶための手立て
 - ① 高校で美術を学ぶ意味を考えさせて、日常生活に役立ち、人生を豊かにし、潤いを与えることを実感させた。
 - ② 日々の観察力の大切さを気付かせ、美術への興味・関心を意識させた。
- (2) 基礎・基本を身に付けるための手立て
 - ① デザインの基礎となる「色」と「形」の学習をしてから、トータルカラーを使った実践を行った。さらに、カラードフォルムを使った「切り絵」に発展し、半立体となる「紙のレリーフ」へと応用の幅を広げることができた。
 - ② 様々な材料体験を通して、ステンシルによる「エコバッグ」の制作に取り組んだ。「絵本」「貼り絵」の制作を通して、じっくりと時間をかけて一つの作品を完成させた。
- (3) 深い学びを実現するための手立て
 - ① 鑑賞では、日常生活の中でアートやデザインを発見し、写真付きレポートにまとめることによって、美術が生活や暮らし、考え方を豊かにしていることを実感させることができた。
 - ② 進路実現に向けて、デッサンの個人指導にも取り組んだ。夏期休業中には、長時間の実技試験対策も行った。

4 成果と課題

<成果>

作品を最後まで完成させ、達成感を味わわせることを目指して指導した。また、全員の作品を掲示または展示することで、人に見てもらう喜びを味わえるよう、工夫した。美術系学校の進路を考えている目的意識の高い生徒たちは、受験に備えた実技課題に真剣に取り組み、技術も精神力も向上したと感じられた。

<課題>

多様な生徒たちの能力の差があり、完成させるまで苦勞する生徒も見られた。一生懸命作ったものは、どんな作品もすばらしいと感じてほしい。また、タブレット端末のさらなる活用術を生徒とともに探りたい。

芸 術 科 書 道

1 目 標

書に親しみ主体的に活動し、向上心を持って取り組む生徒の育成

2 重点事項

- (1) 主体的に学ぶための手立て
- (2) 基礎・基本を身に付けるための手立て
- (3) 深い学びを実現するための手立て

3 今年度の実践

- (1) 主体的に学ぶための手立て
 - ①臨書では題材を複数提示し、各自の能力や興味に応じた課題の提供
 - ②実用的で身近な課題の選択
 - ③相互批正や鑑賞会
- (2) 基礎・基本を身に付けるための手立て
 - ①臨書やビデオ鑑賞
 - ②示書や個別指導（添削など）
 - ③自己批正・相互批正
- (3) 深い学びを実現するための手立て
 - ①創作作品制作
 - ②自己批正・相互批正・鑑賞会
 - ③学習制作カードや自己評価カード、鑑賞カードなどの工夫

4 成果と課題

<成果>

臨書やビデオ鑑賞により基礎的知識や表現力を高め、半切（1/2）などの大きい作品を制作することにより達成感を味わわせ自信を付けさせることができた。また、日本独自の文化である仮名の書では、その歴史や筆使いを学び日本文化の美しさに触れることができた。創作では身に付けた技法を生かし個性豊かな発想で表現や構成を工夫し、表現力と創造力を養うことができた。授業の始めや合間などに実用書道としてペン習字の練習をさせ、手書き文字のよさと美しさを再認識させることができた。さらに颯ご批正や鑑賞会を行い、お互いのよさを学び合うことで鑑賞力や創造力など書の表現技法はもちろん、コミュニケーション能力・発表力・語彙力などさまざまな力を育むことができた。

<課題>

基礎・基本となる臨書作品を提示するため、生徒の能力や関心のある分野をできるだけ早く察知できるよう今後もよく観察したい。また、興味関心を持たせる授業展開や生徒同士が学び合うという主体的な活動の工夫が必要である。引き続き事前の準備を十分行い個別指導を充実させたい。そして、個々の表現能力を高め創造力と鑑賞能力を向上させ、意欲を持たせるための制作内容や評価カードを生徒の実態に合わせて毎回改善し工夫することも今後の課題である。

保 健 体 育 科

1 目 標

主体的に活動し、生涯スポーツの実践に結び付けることができる生徒の育成

2 重点事項

- (1) 主体的に学ぶための手だて
- (2) 基礎・基本を身に付けるための手だて
- (3) 深い学びを実現するための手だて

3 今年度の実践

今年度は、コロナ感染症の影響が少なく、活発的に授業に取り組むことができた。基礎・基本の反復に加え、種目特性に触れることができる授業実践を各単元で意識して行った。そのためにも、ルールの確認や種目特性を体育理論などと結びつけることによって、技能だけではなく知識も授業の中で触れることを意識した。また、タブレットも導入され、動画の撮影や分析、振り返りシートの記入、選択種目の入力などに活用することができ、思考力・判断力など、自己の課題解決にもつながる授業が実施することができた。

2月の下旬には、1・2年生合同で応急手当講習会を開催することができ、保健で得た知識を活用する授業として、有効なものと考え、今後も継続して取り組んでいきたい。



<高校1・2年生：応急手当講習会の様子>

4 成果と課題

「主体性」を育成するために、基礎基本と運動の必要性について、考えながら授業に取り組むことができた。「できる」ことが楽しいにつながるよう、各競技において実施し、「仲間と話ができた。」「意見を言い合うことができた。」など、少しずつ「できる」ことを増やし、生涯を通じて運動に親しむ資質や能力を育成したい。

また、評価基準の明確化と、年間の単元配置の見直し、学習カードの工夫をしていきたい。そして、タブレットの活用を引き続き行い、活動時間を確保しながら、課題解決のための方法を模索していきたい。

家 庭 科

1 目 標

主体的に学び、生活改善に結びつけようとする生徒の育成

2 重点事項

- (1) 主体的に学ぶための手立て
- (2) 基礎・基本を身に付けるための手立て
- (3) 深い学びを実現するための手立て

3 今年度の実践

- (1) 主体的に学ぶための手立て

導入で「今日やること」を示し、本時の見通しと活動を箇条書きで示した。

- (2) 基礎・基本を身に付けるための手立て

ワークシート記入は自学自習によって基本事項の定着を図った。食品衛生に配慮した実習を行うため事前学習チェックシートを用いた。

- (3) 深い学びを実現するための手立て

- ① ホームプロジェクト形式の長期休み課題により生活改善を目指した。

例：1年家庭基礎：夏休みの家計管理実践，冬休みの調理実践

- ② ワークシートは穴埋め式ではなくルーズリーフ式とし、学習の自己調整力や思考して記述する力がつくようを配慮した。

4 成果と課題

<成果>

3年生の選択クラスでは、コミュニケーション力アップの実践を通年で行った。入退室の挨拶，TP0 に応じた発言，傾聴等は一人ひとりの成長を感じた。一方的なプレゼンテーションに偏らないよう，互いを尊重しながら自分の意見も伝えられる関係性を大切にできた。

<課題>

- ① 食物アレルギーがあったりグループ活動が苦手だったり等生徒の多様性が増しニーズは多岐に渡ってきている。生徒の実態に即した実習のありかたを模索しながら，実習を楽しみにしている生徒の気持ちを尊重し，安全に十分配慮していく。
- ② タブレット等による効率的な学びをすすめながら，対話や共感の場面も確保して，思考力・判断力・表現力をサポートしていきたい。

情 報 科

1 目 標

情報活用能力を高め、情報化の進展に主体的に対応できる生徒の育成

2 重点事項

- (1) 主体的に学ぶための手立て
- (2) 基礎・基本を身に付けさせるための手立て
- (3) 深い学びを実現するための工夫

3 今年度の実践

(1) 主体的に学ぶための手立て

- ① 2 学年では、毎時間授業の最後に確認問題を解かせたり、学習内容に沿った実習も多く取り入れたりして学習内容の定着をはかった。3 学年では内容のまとまりごとに実技テストを実施した。
- ② ライフイズテックレッスン（EdTech 教材）を利用して個々で学習を進めながら、3 年生はウェブページの作成、2 年生は授業内容の確認を行った。

(2) 基礎・基本を身に付けさせるための手立て

- ① 練習問題付きの学習シートと実習用の学習シートを配付した。
- ② Word, Excel, PowerPoint やライフイズテックレッスンなどのソフトウェアを適宜使用し、技能の定着を図った。

(3) 深い学びを実現するための手立て

学んだ内容を踏まえ自分の考えや活動を表現し発表、相互評価を行った。



< 3 年 ウェブページ制作の様子 >



< 2 年 オリジナルデザイン発表会の様子 >

4 成果と課題

< 成果 >

技術向上の面では、タイピング練習、文書作成、表計算などの基本的な技能にふれさせた。到達目標を定め取り組んだ結果、自発的に数人で速度を競い合ったり、検定の取得にも意欲的な姿勢を見せたりしていた。また互いの作品を見て、よい点を取り入れるなど積極的に技術向上を目指していた。今後も、継続的に実習を取り入れていきたい。

< 課題 >

各学年で情報モラルを扱っているが、定着したかはペーパーテストだけでは計れない。ロールプレイ、グループ学習やペアワークを通してより一層の定着を図っていく。また、来年度は共通テストも実施されるため、引き続き教科指導を行う必要がある。

— 2 授 業 研 修 —

令和５年度 秋田市教育委員会指導主事等計画訪問

1 訪問日 令和５年１１月１４日（火）

2 指導者一覧

教科等	氏名	所属等
全体指導	櫻田 瑞子 先生	秋田県教育庁高校教育課
	熊谷 之男 先生	秋田市教育委員会
国語	櫻田 瑞子 先生	秋田県教育庁高校教育課
	横山 靖子 先生	秋田市教育委員会
社会	堀井 綾子 先生	秋田市教育委員会
数学	伊藤 智泰 先生	秋田市教育委員会
理科	進藤 義明 先生	秋田市教育委員会
英語	山内 由香 先生	秋田県教育庁高校教育課
	安田 しずか 先生	秋田市教育委員会
保健体育	熊谷 之男 先生	秋田市教育委員会
音楽	佐藤 麻理子 先生	秋田市教育委員会
美術	小柳 紀恵子 先生	秋田市教育委員会
総合	庄内 智矢 先生	秋田市教育委員会
食育	松田 和子 先生	秋田市教育委員会

3 日程

時間帯	時間（分）	内容
８：５０～９：４０	５０	経営説明（高校会議室）
９：５０～１０：４０	５０	一般授業
１０：５５～１１：４５	５０	特定授業Ⅰ
１２：００～１２：５０	５０	特定授業Ⅱ
１２：５０～１４：１０	８０	昼食・休憩（高校会議室）
１４：１０～１５：５０	１００	分科会：中高合同（各分科会会場）
１６：００～１６：３０	３０	全体会（中学校 メディアセンター）

4 特定授業Ⅰ・Ⅱ 授業者一覧（高校）

校時	学年・組	教科等・科目	授業者	授業会場	
3	1年A組	理科（化学基礎）	佐々木 亜 紀	高等学校3階	理科室A
	1年B組	数学（数学Ⅰ）	河 田 好 則	高等学校1階	1B教室
	2年AB組	国語（古典研究）	門 脇 憲 子	高等学校3階	学習室A
4	1年AB組	英語（コミⅠ）	石 川 博 基	高等学校2階	学習室B
	2年AB組	地 公（地理総合）	渡 部 仁 史	高等学校2階	こもれびホール

5 分科会Ⅰ

研 究 主 題

『主体的・協働的・創造的な学び』を実現する指導の工夫
 《高 校》～「見方・考え方」を養い、社会に繋がる学びを探究する授業づくり～
 《中学校》～「学びに向かう力」を高める授業づくり～

教 科	会場 (中高合同)	協議題（教科の授業づくりの視点）
国 語 科	中学校3階 国語教室1	生徒の思いや考えを広げたり深めたりするための授業の工夫と学習評価の在り方
社 会 科	中学校3階 社会科教室2	主体的に学習に取り組み、協働的に問題を解決できる指導の工夫
数 学 科	中学校1階 数学教室3	数学的な思考力の育成と、生徒が主体的に学ぶ授業を構築するための手立て
理 科	中学校3階 理科室3	理科における主体的に学習に取り組む態度の育成の在り方
英 語 科	中学校3階 外国語教室1	進んで自分の気持ちや考えを英語で伝え合うための授業の工夫
音 楽 科	高等学校3階 音楽室	音楽文化を学ぶための教材の在り方
保健体育科	中学校1階 国語教室3	保健体育科において生徒が主体的に活動するための手立て
美 術 科	中学校2階 美術室	想像力を広げ、協働的に新たな価値を生み出す授業づくりの工夫
食 育	中学校3階 共通教室2	生徒の望ましい食習慣を形成するための指導

第2学年AB組理系 国語科(古典探究)学習指導案

指導者 門 脇 憲 子

使用教室 学 習 室 A

1 単元名 史伝「鴻門の会」

2 目 標

(1) 古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めることができる。 【知識及び技能】

(2) 文章の種類を踏まえて、構成や展開などを的確に捉えることができる。

【思考力、判断力、表現力等】

(3) 教材に興味を持って意欲的に取り組み、本文の内容理解に努めようとする。

【主体的に学習に取り組む態度】

3 単元と生徒

2年A組男子6名、女子4名、2年B組男子6名、女子4名の理系選択者20名で構成されている。進学希望者が多く在籍し、明るく活発な生徒達である。2単位の授業でじっくりと漢文に触れることが難しいため、漢文に苦手意識を持っている生徒も多く、学力差が大きい。1年「言語文化」で訓読の基礎基本、2年に故事成語を扱い正確な訓読と書き下し文を書くことはおおむねできている。

この単元では、前漢の武帝に仕えた司馬遷が編纂し、後世に大きな影響を残した『史記』の中から、軍人の家系に生まれ、実力第一の人物であった項羽と、農民階層の出身で後に漢王朝を開くことになる劉邦という二人の英雄の争いを扱う。

長文教材を読むことに慣れていないため、漢文の読解に向けて繰り返し音読しながら、一文ずつ句法を意識して口語訳をすることで、最後まで読解できた達成感を味わいつつ、場面展開のおもしろさを読み取らせたい。また、個性あふれる登場人物の人物像を通して人間の生き方について考え、自他の気づきを共有することで理解を深めさせたい。

4 指導計画（総時数10時間）

学 習 活 動（時数）	育てたい力	評価観点
・作者や作品の時代背景、登場人物の人間関係について知る。 （1時間）	・古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めようとする力。	【知識及び技能】 （2）イ
・本文を読解し、登場人物の心情や人物像を考える。 （2～9時間）本時4/10	・文章の種類を踏まえて、構成や展開などを的確に捉えることができる力。	【思考力、判断力、表現力等】 A読むこと（1）ア
・好きな登場人物についてまとめ、紹介し合う。 （10時間）	・教材に興味を持って意欲的に取り組み、本文の内容理解に努めようとする力。	【主体的に学習に取り組む態度】

5 本時の実際（本時 4 / 10 時間）

（1）ねらい

「項王と范増の言動に注目し、心情を読み取ることができる。」

（2）学習過程

学 習 活 動	教師の指導・支援	評 価
1 既習事項の場面を確認する。 目標 項王と范増の心情に迫ろう。	・人物関係を席次で示す。 ・本時の目標を提示する。	
2 音読する。 3 沛公の行動と発言を学習プリントに書いてまとめる。 4 沛公の心情について、全体で確認する。 5 音読した後、項王と范増の行動や発言を書いてまとめる。 6 項王と范増それぞれの心情について考えを深める。 7 項王と范増の沛公に対する認識の違いを話し合う。 8 他の登場人物の心情を考える。	・沛公の行動と発言を意識するために、ペアで分担して読むよう指示する。 ・学習プリントに、要点を現代語で簡潔に書くよう指示する。 ・沛公のへりくだった姿が読み取れるよう、語句を取り上げる。 ・行動や発言に着目するため、短く切って読むよう指示する。 ・両者の心情が読み取れるよう、項王と范増のやりとりを取り上げる。 ・両者の沛公への認識の違いに気付くよう、沛公への対応について対比する。 ・項荘と項伯の行動に関連した人物に注目するよう助言する。	人物描写に注目し、意欲的に心情を考えているか。 （主体的に学習に取り組む態度） [観察] 項王と范増の沛公に対する心情を読み取ることができたか。 （思考・判断・
9 本時を振り返り、自己評価する。 10 次時の内容を確認する。	・プリントに書くよう指示する。 ・次時の予習をするよう伝える。	

国語科分科会記録

1. 指導者 秋田県教育庁高校教育課指導主事 櫻田 瑞子先生
秋田市教育委員会学校教育課指導主事 横山 靖子先生
2. 教科部員 〈中 学 校〉 齋藤あづさ（授業者）、信太 泉（記録者）、渡辺英志
〈高等学校〉 大原 進（司会者）、門脇憲子（授業者）、正中加代子
3. 教科経営について
(1) 中 学 校…
 - ・目標：多角的な視点を持ち、自ら課題を発見し探究しようとする生徒の育成
 - ・コロナ禍の制限がなくなったことで、コミュニケーションが取りやすくなり、相手とのやり取りや、情報を受ける、発信する活動、顔も合わせ、意見を交換する授業ができるようになった。
 - ・評価の観点が「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点になって3年目だが、まだ、以前の「話す・聞く」「書く」「読む」で評価していたときの感覚が残っている。評価の在り方については、授業づくりの視点として今後も探究していく必要がある。
 - ・本校は教科教室制。各担当で創意工夫し、教室の環境を整えている。これからも系統性をもたせながら運営したい。
(2) 高等学校…
 - ・目標：対話を通して、視野を広げ考えを深めていくことのできる生徒の育成
 - ①主体的に学ぶための手立て
 - ②基礎基本を身に付けるための手立て
 - ③深い学び
 - ・①②を③につなげたい。
 - ・全学年が連携型になって2年目。連携枠以外の外部から受験で入学する生徒が増えており、学力差が広がっている。
 - ・不登校、別室登校等の生徒も入学し、受験は乗り越えたものの、基礎が身に付いていない生徒もいる。
 - ・タブレット端末中心の授業の弊害か、漢字が書けない生徒もおり、国語科では、タブレット端末とノートの兼ね合いを考えて授業を進めないといけないと感じている。
 - ・大学進学を目指す生徒は、口頭試問、論文等の対策のため、主体的に考える、積極的に発言するといった自分の考えを発表する力を付けることが必要である。
 - ・各学年で、朝学習を使い、漢字を練習する、新聞のコラムを読む、視写する、読書をする等の活動を行っている。
4. 特定授業について
(1) 中 学 校…
《授業者より》

- ・『言葉』をもつ鳥シジュウカラ」という題材を計画訪問の授業に選んだのは、文章自体が難しいから。前学期に学んだ説明文「ダイコンは大きな根」「ちょっと立ち止まって」と比較すると、一気に難度が上がった印象である。
- ・「難しい」ということから授業をスタートさせた。難しい文章を中学生に分からせるためには筆者の工夫があるはずだ。難しい言葉を使わない、グラフや写真を活用するということが以外での工夫に着目すべく、全体の構成を取り上げた。
- ・大段落3と大段落4は、仮説、実験方法、実験結果、結論・考察と、論の進め方が同じような構成になっている。それを確認した上で行った授業だったが、生徒が活躍する場面が少なかった。最初に手を掛けすぎてしまったが、生徒に任せた方が活発な活動ができたと感じている。
- ・手法としてコラボノートを利用したが、本来最後に見せるはずのシートが生徒の目に触れる状態になってしまった。ICT機器を活用すると、想定外の出来事が起こる。先生用と生徒用のページが違うことも最近理解した。教育支援ソフトについては、課題をフィードバックして使い勝手のいいものに改良してほしい。実践を重ねないと、有効活用が難しい。
- ・前任校で、古文の学習の際、デジタル教科書を使ったことがある。音声が出たり、便覧をもつ必要がなくなったりして授業がスムーズに進んだが、その時から感じていたICT最大の欠陥は家に持ち帰って復習ができないこと。揮発性が高く、情報が手元に残らないことにある。時間があれば、黒板を写す学習も取り入れたかった。タブレット端末で授業した内容を復習するためには、板書を写すことも必要。

《質疑応答》

- Q ICT機器を使うと授業はスムーズに進むが、定着が不十分。どう感じているか？
- A 知識・技能面は、手で書いた方が覚える。古典分野については、繰り返し読むこと、声に出してリズムを味わうことが大切。QRコードからプロの音読を聞ける点では、デジタル教科書が優れている。また、漢字の学習ではフラッシュ漢字で読みを答えることで楽しむことができ、短時間でできるため有効。漢字の書きは、目で見るだけではあまり意味がないため、書いた方がいい。そのときどきで身に付けるべきものを絞って、どちらが適切かを吟味する必要がある。
- Q グループ活動の際、付箋で入力したものをどう使うのか？
グループ内で共有することもできるのか？
- A コラボノートでは、グループ内で互いのノートを見合うことができるが、比較的新しい機能で今回は用いなかった。指示を出し過ぎて生徒が混乱してしまい、今日は話し合い活動が不活発だった。グループ活動においては、手元に自分で書いたものをもって話し合う際のノート代わりすればいいと考えていた。グループノートを用いて学び合えばよかった。
- Q. タブレット端末と板書のバランスをどのように取っているのか？
- A. そのときどきで、シートにしたりタブレット端末を用いたりしている。シートに書いた内容と同じものをタブレット端末に入力する必要はない。家庭に持ち帰り、力を付けるために必要なものは、常に手元に置けるように、シートに書かせるようにしている。話し合う過程のものはタブレット端末でも構わない。生徒にとってタブレット端末はノートと同じ感覚のようだ。

（２）高等学校…

《授業者より》

- ・前時と間隔が空き、内容の定着に不安を感じていた。生徒は楽をしたがる。考えたくないから答えを検索して参考資料に頼って記録することが多く、考える力が弱まっている。大学受験には記述があり、書く力が求められているため、本時はタブレット端末を用いずに授業を行った。
- ・漢字のテストは手書きで行い、古文の用語や単語テストはタブレット端末で行っている。テストの場では答えられるが、定着度は低い。タブレット端末は気軽に使用はできるものの、学力の定着については心配である。
- ・科目数が高２から増え、論理国語２、文学国語２、古典探究２で授業準備が大変になった。１年生の時の言語文化は２単位で、漢文に充てる時間がなく、基礎・基本をやった程度。文章を読んだり理解したりするまでは至らず、２年生になってから書き下し文に慣れた。
- ・長文教材には慣れておらず、予習は検索して口語訳の丸写し。自分の力での訳は難しい。
- ・本時の授業では、生徒の考えをもっと生かせればよかった。心情の発言をあまり拾えなかった。生徒はそれなりに考えてやっていたが、緊張も見られた。雑談、つぶやき、自由な意見が普段は出るが、今日は堅苦しい感じになってしまった。心情を考えるには、自由に話せる空気が必要。
- ・古典のおもしろさを分からせたいが、時間がないし、文法も扱わなければいけないため、やりくりが大変なのが実情。

《授業について》

- ・中学校で習う内容から大幅にレベルアップしている。
- ・訓読文を書き下し文に直して音読できるのはさすが高校生と感じた。また、古文も漢文もリズムに慣れるために音読が有効であると改めて実感した。
- ・人物の位置を席次で示し黒板に提示したことで、人間関係や場面の状況を捉えやすくなった。
- ・時数的な問題かもしれないが、宴会を開いた時の心情、目配せを受けても相手を殺そうとしなかった心情、項羽が最後まで行動しなかった心情。一つの発言、一つの行動に対してその時の心情を読み取るという対応を丁寧にできればよかった。
- ・項羽は相手を許す気で宴会を開き、范増は殺したいと考えていた。比較するために時系列で縦の板書が効果的では？
- ・今は古文だけでなく小説まで言語文化に入り、十分な時間が取れない。高校の国語科に激震が走った変更だった。文学軽視ではないが時数は減ってしまった。
- ・本時の授業でＩＣＴを活用するならどのような試みが可能であったろうか？ 「史記」を読みこなすには知識・理解、思考・表現の両方が必要。人間関係の確認や漢文の基礎などは映像を用いてもいいのではないか？
- ・対立軸がはっきりしていれば学習活動も盛り上がる。心情Ａと心情Ｂに分かれ、その根拠を明らかにしてコラボノートを用いて対比を視覚化する方法もある。

5. 協 議

協議題

「生徒の思いや考えを広げたり深めたりするための授業の工夫と学習評価の在り方」

生徒の思いや考えを広げたり深めたりするための工夫は？

- ・その日の学習のめあてや学習課題に対応させた振り返りの充実。
- ・感想とＡＢＣ評価の両方で学習シートに自己評価を書くようにしている。
- ・学習のめあてと学習課題を使い分けている。学習のめあては「できた」「やり遂げた」で、評価方法も中身も変わってくる。
- ・考えを広げたり深めたりするのにグループワークや個々の発表を用いている。一人一人の意見を持ち寄ってグループワークを行い、全体で発表し、どれが分かりやすかったか、誰の意見がよかったかで評価する。スピーチでは聞いている人が評価を行い、本人にフィードバックする。
- ・学力差があると、グループワークで役割が決まりがちなので、まずは、自分の考えを書きその後にグループワークを行うようにしている。
- ・「自分の考え」は必ず深めなければいけないのか。友達の見解に耳を傾けて「そういう考えもあるのか」でも十分ではないか。人の意見を聴いて分かろうとするのも、その子なりの主体的な学びと言えるのではないか。
- ・高校では、就職試験、進学試験に向け、自分の意見をもっていないと合格できないという切実な課題がある。聴くだけでは不十分で、自分で考え発信する力は必要。
- ・考えを広げたり深めたりする大切な要素である語彙を増やすことが大切だ。また、自分の考えを論理化するトレーニングも必要である。
- ・高校でも中学校でも、学力の二極化は顕著。基礎・基本を固めることが主体的な学びのベースになる。
- ・教科教室の特性を生かし、語彙を充実させる掲示や既習事項を確認する掲示も可能。
- ・新聞のコラムの書き写しに一言感想を加える学習は、読解力を高めるだけでなく時事問題を知ることでもできて効果的だ。
- ・現在の中・高校生は物事を知らな過ぎて、評論が読めない。ニュースを見ないという生徒も多い。

6. 指導助言

横山先生

- ・既習事項を生かして主体的に取り組む姿が評価とつながる。
- ・コラボノートの活用方法は様々。本時の授業には、これまでの積み重ねの足跡が見てとれる。付箋の色を指定するなどの約束事を決めると視覚的にとらえやすくなり、考えを整理するのに効果的。
- ・前時と本時の論の進め方を重ねてみると共通点が分かり、文章全体のことが分かる。秋田市全体の特徴として、部分的なものは読み取れても、全体を読んだり、複数を関連付けたりする力が弱いことが挙げられる。
- ・「秋田市学校教育の重点」P 8～9 参照。自分なりの表現を選択できるようになるためにも経験を重ねることが必要。

- ・評価「主体的に学習に取り組む態度」は言葉、言語活動を通して試行錯誤していく姿から見とる観察が大切である。たくさん話していても、内容はどうか。既習の学習事項を生かすこと、話し合いの中で新たな気づきをもつことなど、自分自身の変容を振り返りで見とる。その評価の場面を、明確に指導計画に位置付けるべきである。その際、どの場面でどんな力を付けるのかをよく考えなければいけない。
- ・既習事項を生かす指導は、数学科などでははっきりと見えやすい。国語でも意図的に生かす場面を設けることが必要。説明文の読み方も系統的につながっていく。前に身に付けた力を生かして読むことが大切。

櫻田先生

- ・学習指導要領改訂2年目。古典の授業の音読はいい。理屈抜きで古典のリズムを味わうのに音読は有効。
- ・場面を丁寧に読み進めているのがよかった。単元と生徒に「最後まで読解できた達成感を味わいつつ、場面展開のおもしろさを読み取らせたい」とあったが、本時の授業では、きちんと読めたのだという達成感を生徒に味わわせることを重視しているのが分かる。
- ・1時間の授業に内容を盛り込みすぎ、最終的にどこをめざしていたのか分かりづらくなった。生徒が、最後に何ができていたらよかったのかをイメージして授業をしてもらいたい。
- ・項王の心情の変化にもっと踏み込みたかった。付箋方式のジャムボードは、ほかの生徒の意見に引っ張られる、なかなか書けない、たくさん書きたいという生徒には効果的。
- ・指導案の書き方について。単元名は「おススメの本を分かりやすく紹介しよう」「記述に注意して小説のテーマを読み取る」のような書き方に。評価の観点は、「主体的に学習に取り組む態度」ではなく「学びに向かう力、人間性等」に。（言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。）
- ・学びに向かう力は、意欲的な態度、やる気を評価するだけでなく、粘り強さ、積極的に学習に向かう態度も見とることが大事で、高校では単元の最後の方が適切に評価できる。最終的にどのような変化があったかを見とるのがよい。
- ・具体的に、どの場面でどのように評価するのかを押さえておくことが大切。毎時間評価するのではなく、単元の中で何をもって評価するかを決めて授業を行う。
- ・この単元で何を学ぶのか焦点化することが今まで以上に必要で、例えば、心情の変化を扱うのであれば、口語訳は丁寧に行わず生徒に資料を渡して済ます方法でも構わない。映像の力を借りるのもよし。限られた時間の中で行う授業なので、焦点化していくことが一層必要になる。
- ・中学校と高等学校で情報交換できたこの分科会の時間が非常に有意義だった。

第2学年A・B組 地歴公民科（地理総合）学習指導案

指導者 渡部 仁 史
使用教室 こもればホール

1 単元名 第5章1－1 世界からみた日本の地形の特色

2 目 標

- (1) 既習事項である世界全体のプレート分布から、日本列島の位置や地形の特色について考察させる。
- (2) 日本の主な地形の位置を地図帳や写真などの資料をもとに確認させるとともに、地形名を習得させる。
- (3) WebGIS（地理院地図）を活用し、身近な地形の特色について考察させるとともに、自然災害が発生する要素があることを理解させる。

3 単元と生徒

授業クラスは2年生の理系。授業には意欲的に臨む生徒が多いが、「地理」という科目に対しては興味・関心が高いとはいえず、一面的な理解にとどまっている生徒が多い。

本単元では日本の地形の特色を取り上げ、既習事項を基礎に具体的な地形の位置や地名を扱うと同時に、身近な地形についてもその特色や災害発生の可能性について考察させたい。

今回の授業では白地図を使用した作業学習や地理院地図の活用をとおして、学んだ内容を知識として定着させるとともに、生徒の興味・関心を引き出していきたい。また多面的に地理をとらえる視点を身につけさせ、後の発展科目である地理探究に繋げていきたい。

4 指導計画（総時数2時間）

学 習 活 動	育てたい力	評価観点	時数
・日本列島の位置や地形の特色を確認するとともに、身近な地形の特徴を学ぶ。	・日本全体の自然環境の特徴と身近な地形の関わりを理解する力。	ア・イ	本時(1/2)
・日本列島の気候の特色を確認するとともに、自然災害のしくみや特徴、地域性について理解する。	・日本の気候の特徴を反映した自然災害が発生してきたことを資料から読み取り、それをふまえて自然災害時の対策を考察する力。	イ・ウ	1

5 本時の実際(1／2)

(1) ねらい

- ・主題図や資料、写真などの資料を活用して日本列島の位置や地形を確認し、その特色を理解できる。
- ・WebGISを活用して身近な地形を確認し、その特色を理解できる。
- ・自然災害発生時に、自らが取るべき行動について考察できる。

(2) 学習過程

(評価：ア 知識・技能 イ 思考・判断・表現 ウ 主体的に学習に取り組む態度)

学 習 活 動	教師の指導・支援	評 価
1 日本の主な地形を白地図に記入する。 2 白地図を用いて日本で発生する可能性のある自然災害を考え、記入する。 ・日本列島の地形上の特徴は何？ 3 WebGISを活用して御所野地区の地形の特徴を確認し、発生する可能性のある自然災害について考察する。 ・地理院地図を利用して、御所野地区の地形を調べてみよう。	・予め参考とする地図や資料を指示し、あわせて記入例も提示する。 ・大地形の特徴やプレートテクトニクス理論などの既習事項について触れる。 ・ICT機器を利用してWebGIS（地理院地図）を活用し、等高線や地図記号などから御所野地区の地形の特性や、災害発生時の取るべき行動について考察させる。	・日本列島の主な地形を白地図に記入できる。（ア・イ） ・既習事項を踏まえ、自然災害を考察できる。（ア） ・WebGISを活用し、自然災害への対策を意欲的に探究できる。（イ・ウ）

社会科分科会記録

1. 指導者 秋田市教育委員会学校教育課指導主事 堀井 綾子先生
2. 教科部員 <中学校> 斉藤 洋貴（司会者）、渡邊 泰介、熊谷 優記
鈴木 史織（授業者）
<高等学校> 渡部 仁史（授業者）、永井 毅、菅原 裕未（記録者）

3. 教科経営について

（1）中学校…

秋田市社会科の流れを受けて「社会的事象に対する興味・関心を高め、自ら問いを解決しようとする生徒の育成」というところを目標に掲げている。知識・技能よりも思考・判断・表現力を高めるために、「調べた」「考えた」ことを可視化したりキーワードを用いたりして、分かり易く伝え合う言語活動を取り入れている。また、実生活や将来の生活と結びついている社会的事象の教材化を図っている。ペア学習、4人グループ、フリートーク、立場の違いごと等の話し合いを繰り返すことで生徒の力を高めたい。

（2）高等学校…

中学校の連続性を意識した学習を進めている。学力差が大きいのが課題。思考力・判断力を高めることを重視し、主体的・対話的な授業を行っている。新課程になったが、指導する内容に大きな変化はない。年間計画では、一斉授業で行うものと、主題学習的に行うものを区別している。一斉授業の中でも思考力を高める発問をしたり、定期考査で記述式の問題を増やしたり、知識と思考力の両立をねらった授業を心がけている。

4. 特定授業について

（1）中学校…

○ 授業者から

自力で思考したものを立場の同じもので話し合っ根拠をもつ時間と、班にもち帰ってどういう考えが出たかを話し合う時間と2つの話し合いの場を設けた。キーワードを用いるということまではたどりつけなかった。より根拠のある解決策を出せたのではないかなと思う。

○ 参観者から

- ・ 教師間のコミュニケーションがしっかりしていて良かった。生徒は課題を自分事として捉え考えており、生き生きとしていた。
- ・ 2年生は研究旅行を控えていることもあって、より深く考えて学びを次に生かそうと意欲的に見えた。2回の話し合いが生徒の自信につながって、意欲的に発表できる授業展開だった。

- 教科書のすべてを網羅的にやろうと思うと時間の限界が来る。生徒の発達段階に応じて、教科書で何の力をつけたいのかを考えることが必要である。
- 課題を作っていく過程にどのようなことがあったのか。
→ 単元を貫く課題に関しては子どもたちと一緒に作った。関東は他の地方と比べて人口が多いということが子どもたちにとって印象深かったようなのでこのように決めた。前は人口が集まって首都圏でどんな課題が見られると思うか調べさせると「地球温暖化」「通勤ラッシュ」などの意見が上がったが、首都圏に見られる課題に絞った。
- 古い大きな地図・電子黒板等様々な道具を用いて授業をされていた。2種類のディスカッションでは子どもたちが多面的に物事を考えられる工夫がある。主体的に学習させる先生の努力が見受けられた。
- 黒板のレイアウトがきれいだった。シグゾー風のディスカッションでは、課題解決には誰が欠けても進まない雰囲気を作ることで主体性を促していたと思う。
- 先生がグループの答えとして想定していたこととは何か。
→ 首都機能の分散・企業を移動させる・電車の本数を増やす・地下の利用・建物の構造の工夫という答えを予想していた。
- 単元を貫く課題が「交通や通信を中核とした考察」から「人口」に変わっていた。生徒たちから出てきたからといって問いにすると網羅的な指導になるので人口と絡めて交通で押し切ってもいいのではないか。
- 子どもの言葉を拾って作るのはいいが、通信・交通を主題として考えようとブッシュすれば良いと思う。どの資料をどういう順番で出すかで変わってくる。

(2) 高等学校…

- 授業者から
 - 白地図への記入が想像よりできていなかった。生徒の能力に差がある。WebGISはうまく使えるが、一面的なところしか見れない。
- 参観者
 - やるべきことがたくさんあったがテンポが良くスピーディーだった。
 - 個別でじっくり作業させていたが、グループで生徒同士教えあったり学びあったりする時間があったのも良かった。
 - 生徒の食いつきは身近な題材の時に反応が良かったと思う。
 - 災害のことを自分の事として捉えて、興味をもって取り組んでいた。
 - 学力差の問題は中学校ではどのように対応しているか
→ 導入で嫌いと言わせないように手を尽くしている。グループ学習で誰も見捨てないように頑張らせている。

5. 協 議

協議題 「 主体的に学習に取り組み協働的に問題を解決できる指導の工夫 」

- 自分の予想に根拠をもつことが大切であり、それを基にして話し合う活動を積極的に行っている。

- 今現実には起きている社会的事象を考えることで教材の切実性をもたせ、学ぶことの必然につなげることが大切。単元の最初か最後で学習した基礎的な知識などを応用しながら話したり、自分の言葉で説明したりする活動をする、社会的事象の教材化というところになってくる。
- 導入部分が大事だと思っている。教材を厳選したうえで、生徒の心を惹きつけるような映像を見せることを行っている。
- 教科書を開かせないで、今日のテーマをはっきりさせてから授業をやるようにしている。「今日は何をするんだろう」という期待感をもたせ、生徒それぞれが授業に向かうようにしている。
- 一問一答ではなく、歴史の流れなどの社会的な事象について、自分の言葉で表現できるようにするような活動を取り入れている。
- ICT は生徒が共同的に学習できるアイテムになっている。中学校と高校で使っているアプリはそれぞれ違うが、中学校でやってきたことを高校で更に昇華できるように、できるだけ使うようにしている。
- 生徒の実態を把握し、その状況に合わせて問いを工夫することが必要。得意・不得意の差はあるが、生徒に分かりやすく学習課題が伝わるように、言葉を選んでいく必要がある。

6. 指導助言

学習指導要領でこれからの時代に生きる子どもたちに求められる資質能力の育成のために授業改善が求められている。いわゆる主体的・対話的で深い学びである。深い学びの鍵は社会的な見方・考え方を働かせるということであり、そのためには問いと資料を工夫して問題解決的な学習課題を充実させることが必要である。社会科の学習では、単元構想が非常に重要である。資質能力の育成を目指して単元として授業を作っていくこと、探究課題に対して答えを予測する、仮説を立てるという活動をしていかなければならない。自分のもっている知識を使えば、何とか解けそうだという思いを持たせることも大切である。資料で思考を刺激することで、モヤモヤ感をすっきりさせてあげることがのちの探究活動につながる。高校では、中学校までの知識を生かした主体的な学習をすることが大切である。また、評価計画も大切にしていかなければならない。「主体的」な部分の評価には、単元の導入で見通しを立てているかなどを評価していけばよい。主体的に学ぶには、単元の問いの設定が重要で、なぜこの授業をやるのか子どもたちが理解した上でやることが大切である。生徒にとって、必然性があるものになるように準備をしていく必要がある。必要感をもたせるためには答えを予測して言葉を引き出す仕掛けをしていくとよい。社会科の学習では、資料の提示が問題意識を高めたり思考を深めたりする。資料を提示したときに、生徒にとって違和感や謎に思うようにすることで、関心を惹くことができる。ICTの利用の幅が広がっているが本時のねらいの達成のために子どもたちの思考を助ける道具として積極的に活用してほしい。

第1学年B組 数学科学習指導案

指導者 河田 好 則
使用教室 1年B組教室

1 単元名 第4章 図形と計量 第2節 三角形への応用

2 目 標

- (1) 鋭角の正弦、余弦、正接の意味を理解し、直角三角形の辺と角の関係を応用することにより、その有用性を理解させる。
- (2) 鋭角の三角比の性質として、正弦、余弦、正接の相互関係や余角の三角比の関係を理解させる。
- (3) 座標を用いて $0^\circ \leq \theta \leq 180^\circ$ の範囲にある角 θ の三角比を定義する。拡張された三角比の符号や補角の三角比の関係、相互関係も明らかにする。また、第2節の準備として、三角比が与えられたときの θ の求め方を扱う。
- (4) 三角形の辺と角の間に成り立つ基本的な関係として、正弦定理、余弦定理を導き、三角形の辺や角の計量に活用する。
- (5) 三角形の2辺とその間の角から面積を求める方法を理解し、いろいろな三角形の求積問題を扱う。
- (6) 空間図形に含まれる三角形に着目して長さや面積を求める方法を理解させる。さらに、空間図形の計量として、正四面体の体積を取り上げる。

3 単元と生徒

男子21人、女子13人の合計34人のクラスである。おとなしい生徒が多く、グループ活動等で活発な話し合いや積極的な意見はあまりみられないが、演習の時間では真面目に取り組んでいる。この単元では三角比を利用して、線分の長さや角の大きさ、面積などの計算に応用し、その有用性を認識させたい。

本時では、正弦定理を利用した問題演習を行い、基本事項の確認と、発展的な課題に取り組むことで数学的に考える資質・能力を高めるよう指導したい。

4 指導計画（総時数20時間）

学 習 活 動	育てたい力	評価観点	時数
・三角比の定義を踏まえ、三角比の相互関係や三角比の拡張について理解する。	・三角比の定義や三角比の拡張では、図を書いて求めることができる力 ・相互関係を利用して、計算で三角比を求めることができる力	ア・ウ	10
・三角形の辺と角の間に成り立つ基本的な関係として、正弦定理や余弦定理、面積の公式を導き三角形の辺や角、面積の計量に活用する。	・条件から正弦定理や余弦定理、面積の公式を利用して、辺や角の大きさや面積を求めることができる力 ・求めた辺や角の大きさが三角形の成立条件を満たしているかを考察できる力	ア・イ・ウ	10 本時 (5/10)

評価観点 ア：知識・理解 イ：思考・判断・表現 ウ：主体的に学習に取り組む態度

5 本時の実際(15／20)

(1) ねらい

正弦定理を利用した問題演習を行い、基本事項の確認と、発展的な課題に取り組むことで数学的

に考える資質・能力を高める。

(3) 学習過程

(評価観点 ア：知識・理解 イ：思考・判断・表現 ウ：主体的に学習に取り組む態度)

学 習 活 動	教師の指導・支援	評 価
1 本時の目標を確認する。 正弦定理を用いて、辺や角の大きさを求めてみよう！ 2 演習プリントの【復習】にある表を完成させる。 3 演習プリントの【問題】を各自で解く。 4 解いた問題をグループで確認し合う。 5 各グループで解決できなかったところをホワイトボードに記入し、クラス全体で確認し合う。 6 本時の学習内容を振り返る。	・正弦定理の公式を板書する。 ・取りかかることができない生徒には、教科書 P149 の例題 5 を参照させ、できるだけ自力で解くよう助言する。 ・グループ内で答え合わせをし、間違ったところをお互いに教え合い、解決するように指示する。 ・解答を板書する。 ・解決できなかった問題の解説をする。 ・(2)、(3)について、角度が 2 つある場合と 1 つしかない場合の違いについて考察させる。 ・プリントの裏面を利用して振り返りをさせる。	・特殊角の三角比の値が求まっているか。(ア) ・既習事項を活用して課題に取り組むことができるか。(ア・ウ) ・グループ内で解決しようとしているか。(ウ) ・三角形が成立しているかどうかを考察できるか。(イ・ウ)

数学科分科会記録

1. 指導者 秋田市教育委員会学校教育課指導主事 伊藤 智泰 先生

2. 教科部員 <中学校> 阿部 文勇（授業者）、石塚 元（記録者）
<高等学校> 佐々木 佳奈子（司会者）、河田 好則（授業者）
高久 誠、高橋 春世

3. 教科経営について

（1）中学校…「主体的な学びを通して」→主に ICT を活用してやっている。知識・理解から、思考力・判断力の育成に力を入れている。ICT について、生徒が操作から思考をめぐらせるようにしている。

（2）高等学校…「少人数で手厚く」→数Ⅰは習熟度、2年生は文理に分かれるので少人数だが結果的に習熟度にもなっている。今の課題は学力の個人差で、克服するために数学科で協力して取り組んでいる。

4. 特定授業について

（1）中学校… 「相似」の単元では初めから Geogebra を活用して生徒が図形を作成する学習を行った。作成することを通して図形の特徴に注目できるようになった。今日の授業は前半つまづいている生徒が多く時間がかかった。対角線に注目する方法の説明は教師側でも準備はしていたが、生徒が自分たちで見つけていった。最終的にはきちんとした証明につなげていきたい。課題は、学習課題の提示でどの程度詳しくすればよいかや、Geogebra の操作習熟に時間がかかることだった。

（2）高等学校… 数学Ⅰは習熟度でやっているが、他教科の特定授業の関係で単級での授業となった。いつもは間違えているところは伏せて、ホワイトボードに「分かったところを指摘」する内容を書くようにしているが、今日は「間違えているところ」を書くようにした。ホワイトボードに書かれていることが同じようになってしまった。

5. 協議

協議題

「数学的な思考力の育成と生徒が主体的に学ぶ授業を構築するための手立て」

<中学校の授業を通して>

導入から生徒の活動があって、復習の確認として「ある程度全員ができる&できた人が教える」活動が良かった。学力差がある中、グループにするなどの手立てで全く活動できないという生徒はいなかった。今回のように紙では成立しにくい授業で ICT が有効だと思った。対角線に注目させて四角形がいびつな形でも成立することに着目させていたので、

正方形のときはもっと「いびつ」にすらしてもよかったと思う。今後 ICT 機器は小学生から操作に習熟してくるので時間はもっと圧縮できる。

ICT を使ったとき生徒の活動が捉えにくいと思っていたが、今日の授業は参考になった。対角線を生徒がひいていけたのは「今日は中点連結定理」という授業者の間接的な助言があったからだと思う。タッチパネルモニターだとより面白いと思った。

一人一台タブレットを操作したことで全員が操作できる等のメリットもあるが、分からない生徒がつまづいてしまう等のデメリットもある。中学3年生では質問したい人などのアンケートをとり、単元ごとに数学班を作っている。「質問」できる・できない生徒が混じっているという点も主体的な学びにつながっていくと思う。

< 高校の授業を通して >

グループ活動では、早くでできた生徒には(2)で a を求めるなどの追加問題も準備されていて、そのような手立ても大切と感じた。高校の問題演習の場面は習熟度や少人数など授業者のコーディネートがしやすい。

黒板にその日の授業のタイムスケジュールが書かれていて、生徒がこの時間帯で何をするか分かるのがメリットだった。デメリットとして「早くできてしまった」「もう少し時間をかけたい」ときがあるが「目安」として示すことで対応できる。

「主体的」が学習指導要領の最初に来たが、授業では生徒を動かしたいところで、ホワイトボードにしっかり書けたことを認め、拾えていた。「間違えている」ところの「言語化」で深い学びにつながっていた。また、ホワイトボードに書いた場面は ICT を取り入れることが可能で、「間違いを指摘する」「(生徒の)間違いを起点にした」話し合い(学級の間関係もあるが)からめあてにたどり着く流れを作ることができる。

提示している図が鋭角三角形だけだったので、鈍角を伏せていたなと思った。余弦定理も学習済みで生徒が慣れてきていると感じた。答えが2つ出てくることに戸惑っている生徒がたくさんいて、深い学びにつながっていると思った。(2)は図の有用性が感じられた。いつも以上に生徒が取り組めて、全員にちょうどよい負荷の課題だったと思う。生徒が「主役」で一生懸命やれる授業が「主体的」な授業である。生徒が説明するときの「困り感」が生まれると「数学的な表現」の必要性が理解される。

グループの数はどれくらいが適正か悩んでいる。グループ数が多いと各グループが何をやっているのか把握しづらい。中学校では座席を男女市松模様になっているのでグループでの話し合いがしやすい。課題にもよるが機械的にグループを決め、あまりできない生徒同士になってもよい意見が出ることも多い。

指導案の目標は(1)知識・技能(2)思考・判断・表現(3)学びに向かう力・人間性の3観点で書く。

6. 指導助言

タブレットの活用で、個々でやる人、グループでやる人を混ぜることが可能になってきている。やり方を生徒に選択させるのも「学び方」を考えさせることにつながる。「何のための」グループか、焦点化させることが大切である。

(中学校の授業について)

今日の題材は、全員が数学的な活動を通して楽しく学ぶということには難しいものであったが、ICT を使うことで全員が楽しく取り組めるようになった。学びを広げるために証明も

やりたいところを我慢して、根拠を示すことができるところで止めたのが楽しさにつながったと思う。前時に学習したことを使えて、今日の授業はちょうどよい負荷だと思った。今日の授業は生徒に自由に図形をかかせることで、選択の場を増やし、生徒の主体的な学びにつながったと思う。生徒の思考と Geogebra の特性がマッチしていた。

授業者の問い返しの発問で「対角線に注目→対角線の長さに注目→対角線が交じる場所に注目」と焦点化されていくところがよかった。展開としては一度個に戻すことも考えられるが、次時にしてもよいところでもある。

ICT の視覚イメージを「言語化」することが授業のまとめや振り返りとなる。ICT を活用した作業をした生徒としない生徒の差は今後生じていくと思われる。ICT だけでなく、コンパスの使い方等も含め「文房具を使うように」慣れが必要である。その手立てとしてタッチペンの活用も有効である。

「自立」はなんでも自分でやる。ではなく、分からないところは「聞く」こと。「個別最適な学び」の視点には、課題ができた生徒がほかの課題をやるだけでなく、友達に伝える。教えることを通して自分の理解を深める。などの他に「問題づくり」もある。いろいろな視点で取り組んで欲しい。

高校でのグループ作りの課題は中学校とはまた別、高1 前半は話し合いが成り立つが、だんだん話し合えなくなる。個の学びと協働的な学びを一体的に充実させることで、「個の学びで分かったことを、他に伝えたい」等の自然な流れを作り話し合いでの発言を引き出していければよい。

第1学年A組 理科(化学基礎)学習指導案

指導者 佐々木 亜 紀
使用教室 理 科 室 A

1 単元名 物質と化学反応式

2 目 標

- (1) 物質と化学反応式を理解するとともに、それらの理解を深める観察・実験などに関する技能を身に付けることができる。
- (2) 物質と化学反応式について、観察・実験などを通して探究し、物質の変化における規則性や関係性を見いだして表現することができる。
- (3) 物質と化学反応式の関係の理解に主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度を養うことができる。

3 単元と生徒

男子21名、女子13名、計34名。抽象的な概念の理解や数値計算に苦慮する生徒もいるが、ペア活動やグループ活動に意欲的に取り組み、理解を深めたり、問題解決したりしようとする。中学校では、第1分野「水溶液」で質量パーセント濃度について、第1分野「化学変化と原子・分子」で化学反応の前後で物質の質量の総和が等しいこと、反応する物質の質量比が一定であることを学習している。本単元では、粒子の数に基づく量の表し方である物質の概念を導入し、物質と質量、物質と気体の体積との関係について理解し、化学反応式が化学反応に関与する物質とその量的関係を表すことを見いだして理解させることがねらいである。実験や協働的な学びによって物質の概念を定着させた上で、化学反応式の係数比が反応する物質の比を表していることに気付かせ、化学反応の量的関係を物質で表すことの有用性を感じさせたい。

4 指導計画（総時数11時間）

ア：「知識・技能」 イ：「思考・判断・表現」 ウ：「主体的に学習に取り組む態度」

学 習 活 動	育てたい力	評価観点	時数
・原子の質量を相対質量で表す。 ・原子量、分子量、式量を求める。	・原子量の概念を理解し、原子量から分子量や式量を求める力。	ア	2
・物質と粒子の数、質量、気体の体積との関係を説明する。	・物質と粒子の数、質量、気体の体積との関係を説明する力。	イ	4
・設定された濃度の溶液を正しく調製する。 ・溶液のモル濃度を質量パーセント濃度に変換する。	・実験器具を適切に使い、適切な手順で設定された濃度の溶液を正しく調製する技能。 ・溶液の濃度を質量パーセント濃度やモル濃度で表す力。	ア・イ・ウ イ	2 (8/11)
・化学反応を化学反応式で表す。 ・化学反応に関する実験を行い、化学反応式が化学反応に関与する物質とその量的関係を表すことを見いだして理解する。	・化学反応を化学反応式で表す力。 ・実験結果をもとに、化学反応の量的関係を見いだして表現する力。	ア ア・イ・ウ	3

5 本時の実際(2/2)

(1) ねらい

実験器具を適切に使い、適切な手順で設定された濃度の溶液を正しく調製することができる。
モル濃度を質量パーセント濃度に変換することができる。

(2) 学習過程

学 習 活 動	教師の指導・支援	評 価
1 本時の目標を確認する。 本時の目標：1.0 mol/L 塩化ナトリウム水溶液 100 mL を正しく調製することができる。	・本時の目標を提示する。	・班員と協力しながら、主体的に 手順を考えたり 実験を行ったりしている。(主体的に学習に取り組む態度) ・設定された濃度の溶液を正しく調製する手順を示すことができる。(思考判断表現) ・実験器具を正しく用いて、適切な操作手順で調製できる。(知識技能) ・モル濃度を質量パーセント濃度に変換できる。(思考判断表現)
2 前時の復習をする。	・モル濃度の定義を復習し、測り取る塩化ナトリウムの質量が5.9 gであることを確認させる。	
3 1.0 mol/L 塩化ナトリウム水溶液 100 mL を正しく調製する計画を立てる。 ・メスフラスコの使い方と溶液を調製する手順の最初の操作を聞く。 発問：この後、どのような操作を行えばいいか。	・メスフラスコの使い方と手順の最初の操作を説明する。	
・設定された濃度の溶液を正しく調整製する手順を班でまとめる。 ・完成させた計画を全体に発表する。 ・発表した班の手順に追加する操作等を全体に発表する。 ・自分の班の計画を修正する。	・jam board の付箋を追加したり入れ替えたりして、手順通り行えば誰でも正しく調製できる計画を立てるように指示する。 ・代表して1班のみ発表する。 ・発表する班の jam board を電子黒板に映す。	
4 1.0 mol/L 塩化ナトリウム水溶液を調製する。	・必要があれば自分の班の計画を修正するように指示する。 ・机間指導により観察し、必要に応じて支援する。	
5 1.0 mol/L 塩化ナトリウム水溶液を質量パーセント濃度で表す。	・溶液の調製が終わったら取り組むように指示する。	
6 本時の振り返りを記入する。		

理科分科会記録

1. 指導者 秋田市教育委員会学校教育課指導主事 進藤 義明 先生
2. 教科部員 <中学校> 永田謙（授業者）、中田智子（記録者）、宮腰美穂子
<高等学校> 佐々木亜紀（授業者、司会者）、小林吉則

3. 教科経営について

- (1) 中学校…「知識を繋ぎ合わせる」ことで日常生活と関連させ、主体的な学びへと発展できるのではないかと考え、取り組んでいる。
- (2) 高等学校…知識を深い学びへ繋げていけるよう、話し合い活動や発表の場を意識的に設けている。

4. 特定授業について

- (1) 中学校…
 - ・仮説→検証の学習の流れで取り組んでいる。予想のもてない生徒に配慮し選択肢を設ける。また、予想の科学的根拠を説明できるよう支援している。
 - ・考察は「課題との会話」。実験結果を客観的に捉え、考えをまとめることが大切。考察→情報交換→報告の流れで取り組んでいる。
 - ・事前授業では本時の学習課題の把握、エタノールの性質や燃え方、火の扱い方、実験方法についてふれた。
 - ・今回の実験ではエタノールだけが生じたのではなく、実際は「エタノールが多い」。燃やしたあとの燃焼皿の写真を利用しながら、次時で扱うとよい。
- (2) 高等学校…
 - ・自分たちで考え、計画する力を育てたい。「失敗を検証し、次に生かす」学びの場になる。失敗事例を提示し、どこをどう改善すべきか話し合うという授業展開も考えられる。
 - ・molへの親しみ、有用性、molからg（質量）への繋がりについて、振り返りに表れるといいと考えている。
 - ・指導案の「本時のねらい」と実際の評価の観点の整合性があれば、より余裕のある授業展開ができたと思われる。

5. 協 議

協議題 「理科における主体的に学習に取り組む態度の育成の在り方」

「主体的」というのは、学習を振り返り「こうやればよかった、あれがよかった」から始まる。授業時間内で見取るのは難しい。知識と思考、主体的に取り組む態度がバランスよく機能することで学力の向上が図られる。

6. 指導助言

本時の学習のねらいをどこに絞るか、一考することが大切。全体計画の中で、適切に各観点について評価できていればいい。1時間の中で複数の観点について評価するのは現実的に難しいだろう。

第1学年AB組（上位） 外国語科（英語）学習指導案

指導者 石川博基
使用教室 学習室B

1 単元名 Lesson 6 Communication Without Words （英語コミュニケーションⅠ）

2 目標

- （1）情報や感情を伝える（非）言語コミュニケーションについてその基礎的教養を整理して身に付けることができる。
- （2）地域や文化・宗教的要因による差異を理解しつつ、非言語コミュニケーションが果たす役割の重要性について自分の考えを持つことができる。
- （3）非言語コミュニケーションを他者とのやりとりの中で適切に運用し、多様性を持つ非言語コミュニケーション手段についての紹介やそれに対する自分の考えを伝え合うことができる。

3 単元と生徒

本校英語科の特色の1つとして生徒は1年次よりそれぞれの習熟度に分かれて学習する。1学年生徒は68名在籍しており、そのうち本授業対象の上位クラスは36名（男子16名、女子20名）から構成される。できる限り多くの生徒を上位クラスに配置し励ましながら学習させたいという考えから、中には英語に苦手意識を持つ、あるいは学習進度に遅れが見受けられる生徒もいるが、互いに教え合いながら意欲的に学習する姿勢とその環境づくりに努めている。

人間は周知のとおり、ことばのみならず身体や空間、時間、あるいは色彩的等様々な手段を通じて意思の疎通を図る存在である。本単元は非言語コミュニケーションの基礎的仕組みを網羅的に理解できる内容である。加えて、非言語的手段の多様性の理解を通じ、日頃実践するコミュニケーションの手段と方法を生徒が俯瞰して考えることができる。つまり非言語コミュニケーションに対する世界の幅広い捉え方を受け入れながら、生徒が柔軟に行動する自己へと変容を模索することができる。

日本は単一言語使用・単一文化の国と言われることが多い。その中で生きる生徒には、英語ということばの窓から、教室内において意見や情報を整理し口頭で伝え合う他者とのやりとりを通じて、コミュニケーションに対する考えを深めたい。その目的のために、生徒が自己の考えを相手に分かりやすいよう工夫してまとめ、共有することで、他者との関わり方や自己の在り方の重要性、そしてそこにある自己の役割等を生徒が確認できる機会づくりをしたい。

4 指導計画（総時数9時間）

ア：「知識・技能」 イ：「思考・判断・表現」 ウ：「主体的に学習に取り組む態度」

学 習 活 動	育てたい力	評価観点	時数
・（非）言語コミュニケーションの仕組みを理解する。 ・コミュニケーションにおいて大切な要素について考えを持ち伝え合う。	・コミュニケーションに関する用語と具体例を整理する。 ・非言語コミュニケーションの様々な要素について学び合いのなかで気づきを持ち理解を深める。	ア イ・ウ	1
・非言語コミュニケーションの地域差による異なりやその意味の恣意性を理解する。 ・色彩とその認識の多様性についてやりとりの中で考える。	・記号としての非言語コミュニケーションとその意味の恣意性を整理する。 ・他者とのやりとりを通して色彩と人の認識の異なりに気づき意見を述べる。	ア イ・ウ	1
・非言語コミュニケーションと宗教や文化の関わりを知り、いくつかの特徴的事例について理解する。 ・あいさつにおける様々な非言語コミュ	・日本と海外の非言語コミュニケーションやその役割の異なりを整理する。 ・世界の様々な非言語コミュニケーション	ア イ・ウ	1

ニケーションに共感的な姿勢で意見を 持ち、互いに伝え合う。	をやりとりの中で受け入れ認め合う。		
・コミュニケーションの障壁とそれを超 り越える手段について基礎的な知識を 得る。 ・非言語コミュニケーションにおける要 素の1つについて、大切にしたい理由を 伝えあう。	・言語習得の様々な方法について理解をす る。 ・非言語手段によるコミュニケーションの 重要性について学び合う。	ア イ・ウ	1
・学んだ非言語コミュニケーションから それぞれが1つ取り上げ【探究・課題解 決型学習】、その特徴と自分の意見をま とめ、伝え合う【実技テスト】。	・既習事項を整理して理解を深める。 ・自分の意見を相手に分かりやすく工夫し て伝える。	イ・ウ	2
・補語としての that 節と対比を示す while についての言語知識を整理して理 解する。	・事実について詳しく述べたり、対立する 2つを比較したりする表現に慣れ親しむ。	ア	1
・形式目的語 it と間接疑問文についての 言語知識を整理して理解する。	・モノ・コトに対する思考や理解を述べた り、疑問文を目的語に据えて述べたりする 表現に慣れ親しむ。	ア	1
・非言語コミュニケーションを紹介する やりとりを通じてその手段を学び合う。 ・自らも積極的に非言語コミュニケーション 手段を活用し、相互コミュニケーション が円滑に進む方法を試行錯誤する。	・非言語コミュニケーションにおける幅広 い価値観や多様性について理解を深める。 ・コミュニケーションに重要なことばによ らない手段の重要性を把握し適切に運用 する。	イ・ウ イ・ウ	1 (本 時)

5 本時の実際（9／9）

（1）ねらい

- ・非言語コミュニケーションの特徴や機能等を相手にわかりやすく工夫しながら伝え合うやりとりを通じて、その幅広い価値観や多様性とその会話の豊かさについて理解を深めることができる。
- ・自らも積極的に非言語コミュニケーション手段を活用しながら、その運用方法や意思疎通における重要性についてやりとりを通して学び合うことができる。

（2）学習過程

学 習 活 動	教師の指導・支援	評 価
1 帯活動 語彙学習（5） 単語帳を用いて語句の音や意味を確認し合う。	・語句の音や意味が適切に運用されているか確認する。	
2 本時の目標提示（1） 非言語コミュニケーションを 友人と伝え合い、習得しよう		
3 基本文の確認と発話練習（6） 紹介のための基本文を確認し、ペアで 伝え合う。	・段階的な発話練習を生徒と行いなが ら、それぞれが自分で基礎的な紹介を 行えるよう確認し支援を行う。	
4 紹介活動（18） （1）課題を把握し基本的な紹介方法 で伝え合う。 （2）視線・声・動作・表情を工夫し てより分かりやすく伝え合う。	・自己練習でのつまづきに対し支援を 行う。 ・活動が自然な形で発展するよう相互	

(3) 自分の考えを加えながら伝え合う。 問：あなたは非言語コミュニケーションをいつ・どこで・誰と使いましたか？ (発展 なぜ非言語コミュニケーションを使うのですか？) (4) 非言語コミュニケーションの存在意義やその活用について自分の考えを伝え合う。 5 まとめ(20) 本時の学び合いで身につけた紹介と自己の意見をまとめ共有する。	評価の観点を意識させる。 ・生徒の様子に応じて全体で表現方法について再確認の機会、あるいは一部の表現を共有する機会を設ける。 ・聴く立場が感想をどのように述べるか段階的に支援する。 ・聴く立場が話し手の考えについてどのように評価すべきか把握させる。 ・机間指導によりそれぞれに応じた支援を行う。	・非言語コミュニケーションの特徴や機能等を、自らもその手段を用いながら相手に分かりやすい方法で伝え合っている(伝え合おうとしている) (イ・ウ(観察)) ・非言語コミュニケーションの幅広い価値観や多様性を深く理解し、自分のことばで書いてまとめている(まとめようとしている) (イ・ウ(ワークシート))
---	---	---

授業アンケート(第1回)集計結果

今年度の研究主題

「『主体的・協働的・創造的な学び』を実現する指導の工夫」
～「見方・考え方」を養い、社会に繋がる学びを探究する授業づくり～

4：そう思う 3：だいたいそう思う 2：あまり思わない 1：思わない

(R4年7月) (R4年12月) (R5年7月)

			1 授業者の指導について		最高 最低	平均	最高 最低	平均	最高 最低	平均	
A	授業 の仕 方	1	授業のねらいや目標が明確に示されている。		3.9 3.4	3.7	4.0 3.4	3.7	3.9 3.1	3.6	↓
		2	発問や教材に工夫があり、説明が分かりやすい。		3.9 3.3	3.6	3.9 3.1	3.6	3.9 2.8	3.5	↓
B	授業 規律	3	規律ある雰囲気での授業が行われる。		3.8 3.4	3.6	4.0 3.4	3.7	3.9 3.1	3.6	*
		4	チャイムとともに授業が始まり、チャイムとともに授業が終わる。		3.8 3.4	3.7	3.9 3.4	3.7	3.9 2.9	3.7	*
C	研究 主題	5	自分の考えを深める時間が確保されている。		3.9 3.3	3.7	3.9 3.3	3.7	4.0 2.9	3.6	↓
		6	生徒間や先生と意見を出し合う場面が良くある。		3.8 3.2	3.6	3.9 3.0	3.6	3.9 2.9	3.5	↓
D	学力 向上	7	授業を受けると、充実感を得たりやる気が出たりする。		3.9 3.1	3.4	3.9 2.9	3.4	3.9 3.1	3.4	*
		8	興味や関心が持て、学力（体力・技術）の向上につながっている。		3.8 3.2	3.5	3.8 3.1	3.5	3.9 2.8	3.4	↓

			2 自分自身の取組について		最高 最低	平均	最高 最低	平均	最高 最低	平均	
a	授業 準備	1	予習や復習を主体的に行って授業に臨んでいる。		3.4 2.8	3.1	3.7 2.9	3.2	3.6 2.6	3.0	↓
b	授業 姿勢	2	授業には、きちんとした態度で臨んでいる。		3.8 3.4	3.6	3.8 3.4	3.6	3.9 3.4	3.6	*
c	研究 主題	3	自分の考えや疑問を述べたりして、積極的に授業に参加している。		3.6 2.9	3.3	3.8 3.1	3.4	3.8 2.8	3.3	*
d	学力 向上	4	(予習・復習以外に) 演習問題に取り組むなど、学力向上に励んでいる。		3.5 2.8	3.1	3.6 2.9	3.1	3.9 2.6	3.1	*

※ 昨年の1回目と比べて上昇は↑、同じは*、下降は↓

3 授業者への建設的な要望があれば記述してください。

省略

授業アンケートより

1 授業者の指導について

昨年の1回目(R4年7月実施)と比較してみると、大きな変化はないが、8項目中5項目で下降している。授業規律(A)は良好だが、授業の仕方(B)、研究主題(C)で下降している。特にA-2「発問や教材に工夫があり説明が分かりやすい」の項目は一昨年3.7、昨年3.8、今年3.5と年々下がってきている。C-6「生徒間や先生と意見を出し合う場面がよくある」も同様。

2 自分自身の取組について

昨年と比較して大きな変化は見られないが、a-1「予習や復習を主体的に行って授業に臨んでいる」の項目が昨年度の1回目、2回目より下降しており数値も低い。

3 今後の課題(全職員記入の「課題と改善策」より)

・生徒の要望に「話し合いやグループワークの時間を増やして欲しい」との要望があった、と書いていた先生が23人中8人いた。A-2やC-6の数値からも教師主体の授業になっている傾向があるのではないだろうか。研究主題にある「生徒主体の主体的・協働的・創造的な学び」を目指した授業実践を行い、市教委訪問や第2回アンケート(12月)に繋げてもらいたい。
・生徒の取組(「予習や復習を主体的に行って授業に臨んでいる」)の数値が低いことへの改善策として、「単元ごとの学習のめあてや到達目標を明示し、自発的に学習に取り組む意欲を喚起できるよう工夫する」と書かれた先生がおりました。

授業アンケート(2回目)集計結果

今年度の研究主題

「『主体的・協働的・創造的な学び』を実現する指導の工夫」
 ～「見方・考え方」を養い、社会に繋がる学びを追求する授業づくり～

4: と思う 3: だいたいと思う 2: あまり思わない 1: 思わない

(R4年12月) (R5年7月) (R5年12月)

			1 授業者の指導について		最高 最低	平均	最高 最低	平均	最高 最低	平均	
A	授業 の仕 方	1	授業のねらいや目標が明確に示されている。		4.0 3.4	3.7	3.9 3.1	3.6	3.9 3.3	3.6	*
		2	発問や教材に工夫があり、説明が分かりやすい。		3.9 3.1	3.6	3.9 2.8	3.5	3.8 3.2	3.6	↑
B	授業 規律	3	規律ある雰囲気での授業が行われる。		4.0 3.4	3.7	3.9 3.1	3.6	3.9 3.3	3.6	*
		4	チャイムとともに授業が始まり、チャイムとともに授業が終わる。		3.9 3.4	3.7	3.9 2.9	3.7	3.9 3.0	3.7	*
C	研究 主題	5	自分の考えを深める時間が確保されている。		3.9 3.3	3.7	4.0 2.9	3.6	3.9 2.8	3.6	*
		6	生徒間や先生と意見を出し合う場面が良くある。		3.9 3.0	3.6	3.9 2.9	3.5	3.7 2.8	3.5	*
D	学力 向上	7	授業を受けると、充実感を得たりやる気が出たりする。		3.9 2.9	3.4	3.9 3.1	3.4	3.9 3.0	3.5	↑
		8	興味や関心を持て、学力（体力・技術）の向上につながっている。		3.8 3.1	3.5	3.9 2.8	3.4	3.8 3.1	3.5	↑

			2 自分自身の取組について		最高 最低	平均	最高 最低	平均	最高 最低	平均	
a	授業 準備	1	予習や復習を主体的に行って授業に臨んでいる。		3.7 2.9	3.2	3.6 2.6	3.0	3.6 2.8	3.2	↑
b	授業 姿勢	2	授業には、きちんとした態度で臨んでいる。		3.8 3.4	3.6	3.9 3.4	3.6	3.9 3.2	3.6	*
c	研究 主題	3	自分の考えや疑問を述べたりして、積極的に授業に参加している。		3.8 3.1	3.4	3.8 2.8	3.3	3.8 3.0	3.4	↑
d	学力 向上	4	(予習・復習以外に) 演習問題に取り組むなど、学力向上に励んでいる。		3.6 2.9	3.1	3.9 2.6	3.1	3.8 2.9	3.2	↑

昨年の1回目と比べて上昇は↑、同じは*、下降は↓

3 授業者への建設的な要望があれば記述してください。

省略

1 授業者の指導について

1回目(7月実施)と比較すると、特に大きな変化は見られないが、A-2「発問や教材に工夫があり説明が分かりやすい」、C-7「授業を受けると、充実感を得たりやる気が出たりする」、C-8「興味や関心を持て、学力の向上につながっている」の3項目(8項目中)で0.1ポイント上昇している。授業規律のB-4「チャイム始業、チャイム終了」の項目が3.7で最もポイントが高い。

2 自分自身の取組について

1回目(7月実施)と比較すると全ての項目において上昇がみられる。しかしながら昨年度の同時期と比較すると、ほぼ同様の数値となっている。a-1の授業準備(予習・復習)の数値が上がるよう生徒の主体的な取り組みを促す働きかけが必要と思われる。

3 今後の課題(全職員記入の「課題と改善策」より)

本年度の研究主題は「『生徒主体の主体的・協働的・創造的な学び』を実現する指導の工夫」であった。「課題と改善策」の記述からは、多くの先生方が生徒が主体的に学習に取り組めるよう授業を工夫されているが、まだまだ十分ではなく、更なる授業改善を目指そうとする意欲が感じられる。次年度も引き続き授業力向上を目指して教科内で、全体で取り組んでいただきたい。

— 3 各種研修 —

実践的指導力向上研修講座（高等学校 8 年目）

教諭 門脇 憲子

1 概 要

(1) 目標

自己理解に基づき、個々の個性・適性、分掌等に応じた資質能力の向上を図る。

(2) 日程

① I 期（6 月 23 日）

不登校の未然防止と対応＜講義・演習＞

学校組織の一員として－自己理解に基づく目標設定－＜講義・演習＞

カリキュラム・マネジメント＜講義・演習＞

② II 期（8 月 8 日）

カリキュラム・マネジメントを軸とした授業改善＜協議・演習＞

2 成果と課題

＜成果＞

I 期について、不登校児童生徒が増加傾向にあることを知る。本校でも不登校傾向にある生徒が増えていると感じている。気になったら声をかけ、未然防止に努めることが大切だと再認識した。また、本校で実施している Q－U 等を活用しながら、生徒が自己有用感を高められる居場所づくりのために、授業や学級経営の中で「アイ・メッセージ」等の言葉かけを大切にしていきたい。「学校組織の一員として」では、学校の良さや課題を整理することができ、自己理解にも繋がった。よりよい学校を目指した目標を設定して、日々意識して取り組みたい。そして「カリキュラム・マネジメント」について学んだことを活かし、情報収集しながら授業実践に生かしたい。

II 期に関しては、他教科の授業の様子を見ることができた。コロナ禍で中断されていた生徒の活動が再開され、ジグソー法が多く取り入れられていたのが印象的だった。形態にとらわれず、そこからどのような学びがあるか、生徒の育てたい力の視点を大切にしたい。初心に返り、実際の授業でもグループ学習を復活させたいと思った。

＜課題＞

教科ごとに分かれて振り返りを行った際、初任者研修時から人数が半減して 2 名となりさみしく思った。指導主事より年間計画を年度末に作成しているとの話があった。年度末は、高校入試が連携型、特色・一般、2 次募集と三回もあり、科としての負担も大きく、進学希望者への対応、さらに担任や分掌業務なども重なり、心理的にも時間的にも余裕が無く、職員数の少ない本校で年度末に次年度の年間計画を作成するのは困難を感じる。だができないではなく、見通しを持って取り組むことは大切だと思う。新学習指導要領における新設科目の授業実践例や観点別評価が求められるようになり、評価の充実とその質の向上についての研修を期待していたが、国語科としての交流が少なく実態をつかめないまま終えてしまったのが残念だった。ICT 活用についても注目していたが、研修した同グループで実践している人が少なく全体的にまだ活用しきれていないようだった。今回の研修では自らの授業スタイルを客観的に振り返り、見直す良い機会となった。今後は今回学んだことを意識して活用するよう日々取り組んでいきたい。

— 4 郷土学・表現科 —

郷 土 学

1 目 標

生き方を探求する郷土学の実践 ～郷土の一員としての自覚と誇りをもった生徒の育成～

2 重点事項

- (1) 郷土秋田を愛し、よりよい秋田を創造していこうとする心や実践力の育成
- (2) 自分の将来の生き方や在り方を探求しようとする意識の向上

3 今年度の実践

(1) 1・2年生「分野別講座」

- ① 4月に6講座（「環境と人間」「国際化社会と秋田」「地域活性化と経済」「健康と看護」「秋田の食文化」「秋田の文化と歴史」）のガイダンスを行い、その後希望する講座を選択した。
- ② 5月上旬から6講座に分かれ、社会人講師による講話を4回実施した。
- ③ 講座ごとに夏季休業中にフィールドワークを行った。終了後、取り組んだ内容と感想を報告書にまとめて提出した。大雨の影響によりフィールドワークが実施できなかった講座では、代わりにレポートを課し、提出させた。
- ④ 8月以降、講話やフィールドワークの内容を参考に、各グループに分かれ、今年度の探究テーマを決定した。そのテーマについてグループごとにプレゼンテーションを作成し、12月中旬に各講座内で発表会を行った。この発表会で各講座の代表グループを決定した。
- ⑤ 2月上旬に今年度の成果を発表する「郷土学発表会」を実施し、全員がプレゼンテーションソフトを用いて発表を行った。第1部では講座別に分かれて各教室ですべてのグループが発表し、第2部では各分野の代表グループによる発表を体育館で実施した。生徒は評価シートを用いて互いの発表を聞き評価した。社会人講師からは講評をいただいた。
- ⑥ 2月2日（金）の「郷土学発表会」終了後、1年間の振り返りをレポートにまとめた。

(2) 3年生「研究論文」

1・2年生での活動を踏まえ、自らが興味関心を持つ分野について各自でテーマを設定して探究活動を行い、論文を作成した。内容について、それぞれの担当教員と協議を重ね、最終的に「研究論文」として完成させた。また、これまでに培った力をもとに、自らの進路志望達成に向けて、進路別学習に主体的に取り組んだ。

4 成果と課題

<成果>

今年度も1・2年生全員がプレゼンソフトを用いて発表する形式をとった。全員がタブレットを活用して探求活動ができることや、郷土学発表会を2月上旬に設定したことで、今まで以上にプレゼン作成に時間をかけることができた。その結果、各グループとも内容が深まり、発表会後の社会人講師による講評では「どの発表グループも完成度が高く、聞いている人を意識した素晴らしいプレゼンが多かった」、「テーマ設定の理由や考察の説明が明快で分かりやすい」などのお褒めの言葉を頂いた。また、質疑応答では積極的に質問する姿が見られ、活発な発表会となった。

3年生の研究論文も、タブレットを活用したおかげで内容の深化が見られた。

<課題>

今年度のフィールドワークの日程が竿灯祭りの日と重なってしまったため、移動の際に利用するバスの手配に苦勞したことや、日程変更を余儀なくされた分野もあったので、来年度はそのことも考慮しながらフィールドワークの日程を考えていきたいと思う。

昨年度よりも各自の探求時間が多くなり、プレゼンの準備時間が多く取れたが、ネットによる情報に依存しすぎる傾向にあり、書籍の利用が少なかったように感じた。進捗状況を確認しながら、内容の濃い発表にするために適切に助言を与えていきたい。

分野によっては人数の偏りが生じ、担当される先生方の負担も大きかった。できれば6分野均等な受講者数になることができるよう考慮していきたい。

表 現 科

1 目 標

文化を学び、コミュニケーション能力や自己表現力を高める表現科の実践

2 重点事項

- (1) 主体的に学ぶための手立て
- (2) 思考力・判断力を身に付けるための手立て
- (3) コミュニケーション能力を身に付けるための手立て

3 今年度の実践

- (1) 主体的に学ぶための手立て

表現科カードを活用し、一人一人が目標をもち、自己の取組を振り返りながら自己表現力を高めることができたようにした。

- (2) 思考力・判断力を身に付けるための手立て

社会人講師の指導を受けながら自らのテーマを設定して活動することで、思考力・判断力を育成した。

- (3) コミュニケーション能力を身に付けるための手立て

中学生との合同講座では、高校生が中学生の手本となるよう中学生をリードした。

高校生の単独講座では、学年をこえて教え合うなどの活動を通して、コミュニケーション能力の育成を図った。

4 成果と課題

<成果>

社会人講師の先生方の熱心な指導のもと、生徒は意欲的に参加していた。発表会に向けての活動回数が限られている中で、それぞれの講座で工夫し協力し合ってよりよいものを作ろうという、一体感や達成感を感じることができた。また、発表会当日は、展示部門の講座の高校生が進行や運営を担当し、発表会をスムーズに行うことができた。

<課題>

御所野学院中学校以外からの入学者が半数以上の現在の状況では、同じ講座を継続して受講している生徒も少なく、高校生のリーダーシップやより高いレベルでの作品作り、発表内容等にあまり期待できないところがある。高校生の役割や表現科のあり方そのものを再考する時期にきていると思う。

II 各分掌実践

総 務 部

1 目 標

安全で整備された学習環境を維持しながら、地域に開かれた学校として情報の発信につとめる。

2 重点事項

- (1) 緊急時により迅速で組織的な対応ができる体制を整備する。
- (2) 地域・関係諸機関との連携を深める。
- (3) P T Aをより組織的に運営する。

3 今年度の実践

- (1) 緊急時により迅速で組織的な対応ができる体制の整備について
 - ① 中高合同防災訓練をととして、災害等緊急時の連絡体制ならびに対応の仕方を周知・徹底した。休み時間に訓練を実施することで、災害時主体的に行動する態度の育成を図った。
 - ② 安全点検業務の責任分担と習慣化を徹底した。
- (2) 地域・関係諸機関との連携について
 - ① 毎月の行事予定や行事の様子をホームページで積極的に発信した。
 - ② P T A会報を御所野地区町内に回覧し、学校理解を図った。
- (3) P T Aの組織的な運営について
学院祭でP T Aの催し物が再開されたことに伴い、P T A役員の結束が深まり組織的な運営に繋がった。環境整備活動や朝の一声運動などにも、役員の方々と声をかけあって参加して下さり、昨年度よりも参加者を増やすことができた。

4 成果と課題

<成果>

学校行事をほぼコロナ前の状況に戻して実施することができた。特に学院祭では、P T Aの催し物をより安全安心な形で考え工夫して、多くの役員の協力のもと実施できたのはよかった。また、中高合同の防災訓練も、問題点は多く見つかったものの休み時間に実施するなどより実践的な訓練にできたのはよかった。

<課題>

P T A役員の参加は増えたが、どの行事においても保護者の参加人数はまだまだ少ない。行事や活動のお知らせなどを積極的に情報メールで発信するなどして、役員以外の保護者の参加を増やす手立てを考えていきたい。特に、P T A総会は、実施の方法を含め検討が必要な課題と考える。

教 務 部

1 目 標

連携型に向けて特色ある教育課程の編成と中高一貫教育の充実と学力の向上

2 重点事項

- (1) 基礎学力の定着と個性を生かす教育の充実
- (2) 主体的に学習に取り組む態度の養成と家庭学習時間の確保
- (3) 連携型中高一貫校を視野に入れた教育課程の編成

3 今年度の実践

- (1) 令和4年度から新学習指導要領に移行する教育課程編成に向けて、各教科と科目編成の協議をし、新学習指導要領に対応した連携型の教育課程を完成させ、生徒の目標を効果的に実現できるような教育課程の編成について検討をした。
- (2) 基礎学力の定着を図る授業の工夫・改善を目指し、研修部や教科と連携をとりながら、職員研修や校内授業研修会を実施した。
- (3) 各定期考査2週間前から学習強調期間を設定し、生徒の学習環境を整備した。学習パワーアップシートは、購入させている手帳を活用し、生徒本人が計画・実行・反省のパターンを身に付けることができるように計画的に進めた。

4 成果と課題

<成果>

各定期考査2週間前から学習強調期間を設定し、考査前に学習計画を作成させることにより、生徒が計画性をもって学習に向かうことができるようになり、担任は生徒の学習状況を把握し、具体的な助言ができるようになったと考える。御所野学院中学生に対し、高校の体験授業学習を行うことで、高校の学習に対する関心・意欲を高めることができ、連携型中高一貫校として本校への進学に向けて何をするべきかを具体的にイメージさせることができたと思う。今後は連携型中高一貫校として計画的・継続的な教育課程を展開することによって、生徒の個性や創造性を伸ばすとともに、特色ある教育活動を展開するよう工夫していきたい。

<課題>

学習時間不足や生徒間の学力差が大きくなるなど、学習に対して多くのことが課題となっている中で、今後も学年部、進路指導部と検討し、より教育的効果を発揮できるように考えていく必要がある。生徒一人一人の理解を深めるための授業改善が必要である。

研 修 部

1 目 標

教職員の指導力向上につながる研修内容の充実と、授業改善の推進を図る

2 重点事項

- (1) 教職員が自らの指導力を高められる研修を推進する。
 - ・分掌や教科間の連携をとりながら研修を企画し、成果と課題を「実践記録集」にまとめる。
- (2) 中高一貫校の特色を活かした公開授業と研究会を実施する。
 - ・中高共通の研修テーマに沿った公開授業を実施し、中高合同研究協議会を実施する。
 - ・各教科の「研究主題」については、中高合同教科部会を実施し、具体的な取り組み方法を確認する。
 - ・公開授業については、全員が中学校・高校の授業を参観できるよう配慮する。
- (3) 授業評価の実施とPDCAサイクルの確立による授業改善を目指す。
 - ・年度初めに「授業改善目標」を策定して授業を実践する。
 - ・学期ごとに授業アンケートを行い、各自の授業改善目標の検証・修正を行う。

3 今年度の実践

- (1) 秋田県教育センターを始めとする各種研修講座の紹介や事務手続きを行い、教職員のキャリアステージに応じた研修受講を奨励した。
- (2) 秋田市教育委員会計画訪問では、中学校の研究部と連携して計画実行した。中高合同で共通の研究主題に沿った研究授業や分科会を実施した。
- (3) 授業アンケートを7月と12月の年2回実施し、生徒の評価に基づき、授業改善目標の検証と修正を行った。

4 成果と課題

<成果>

教職員が各種研修を積極的に受講し、研修によって身に着けた事柄を授業や生徒指導等の業務に活用し、自らの指導力向上に繋げることができた。秋田市教育委員会計画訪問において中学校の授業を参観し、中学校の教職員と積極的な意見交換をして異なる校種の授業への取り組みを知ることができたことは、貴重な経験となった。

<課題>

昨年度までの教務・研修部が教務部から独立して研修部となった初年度であったが、これまでの諸先生方の取り組みを参考にして実施したものが多かった。研修部として最近の諸課題に対応する校内研修を企画することができなかったことを次年度の課題とする。また、職場の多忙化を改善することでゆとりも生まれ、教職員の研修に対する意欲も更に増すものと思われる。

生徒指導部

1 目標

基本的生活習慣を確立し、ルール・マナーを守り、主体的に判断、行動できる生徒の育成

2. 重点目標

- (1)「生活の心得」を基本とし、その実践を目標として全職員・全生徒の連携と協力を図り、生徒の指導を徹底する。
 - ①整容指導のあり方を検討、確立する。制服の正しい着こなしを教職員と生徒間で共有し、注意すべき点については徹底した指導をする。
 - ②授業の中での生徒指導を行い、キャリア教育の視点からの生徒指導を行う。
 - ③いつでもどこでも誰とでも挨拶をし、声を出す習慣を身につけさせる。
 - ④携帯電話・スマートフォンの使用方法・利用方法の指導をする。
 - ⑤貴重品管理については自己管理ができるよう指導する。（ロッカーは常時施錠）
- (2)生徒の実態を把握するため、学年部・学級担任・養護教諭との連携を密にし、情報を共有することで全職員共通理解をもって指導を推進する。
- (3)学校・地域・PTAと連携しながら、校内外の生活指導体制を充実させる。
 - ①定期的な校門指導を充実させる。
 - ②交通安全意識の高揚を図り、法令を遵守し、生命を尊重する態度を養う。
- (4)生徒会・委員会・学年部と連携を密にし、生徒主体で活動できるよう支援する。

3. 今年度の実践

- (1)制服の着こなしについて生徒との共通理解を目指しながら整容指導を年7回行った。
- (2)学校生活のスタートをスムーズに行うために、生徒指導部職員による遅刻防止・挨拶指導を毎朝行った。いじめアンケートと学校生活に対する意識調査を実施し、生徒の実態把握に努め、学年・担任・養護教諭と連携し必要に応じて保護者も含め面談等を行った。
- (3)「交通安全」や「消費者教育」のために外部講師を招き、講演会を行った。
また、交通安全の一環として県中央警察署と連携しDJポリスの活動を行った。
- (4)今年度の取り組みに対し、生徒と協議しながら次年度へ向けて学校生活の心得の改善に努めた。

4. 成果と課題

<成果>

- (1)制服の着こなし方について昨年度から検討を重ねてきたが、概ね良好であると認識している。更に次年度に向けて生徒・職員で検討を行い、生徒の過ごしやすい環境作りのための共通理解を得ることができた。
- (2)学校生活に対する意識調査を定期的に行うことで、生徒の抱えている事柄について把握に努めることができた。当事者生徒とのコミュニケーションを取る機会も増え、抱えている悩みやクラスの状況等を把握することに繋がった。

<課題>

- (1)整容については、生徒と職員間の共通理解がまだまだ曖昧な点があった。
遅刻を8時40分にすることで、朝学習についての指導が曖昧になってしまった。
- (2)先生方や来校者に対しても自然に挨拶できる生徒の育成を目指したいが、声を発することに苦手意識を持つ生徒が多い。
- (3)事件・事故の未然防止に努めるために、基本的な生活を習慣化させることが重要である。
必要であれば関係機関との連携を深めることを今後も継続していきたい。

特 別 活 動 部

1 目 標

集団活動を通して望ましい人間関係を構築し、豊かな表現力を発揮できる生徒を育成する。

2 重点目標

- (1) 自己理解・他者理解を深めるホームルーム活動の推進。
- (2) 特別活動を通じた思いやりの心の醸成と、主体的に課題に向き合い行動する態度の育成。
- (3) 円滑な生徒会活動のための支援体制の確立。

3 今年度の実践

- (1) 学級担任を中心に学年で連携しつつ、手帳支援プログラムを通じた自己管理力の育成、及びホームルーム活動等での面談と対話による自己肯定感を持たせる働きかけを充実させた。
- (2) あらゆる活動の機会において、生徒が一人一役以上の役割を担い、学級や学校全体のために活躍する機会を設定した。加えて個々の生徒が自らの役割を全うすることの大切さをホームルーム活動の時間を中心に指導した。
- (3) 各委員会等では目標に応じて取り組みを工夫し、生徒が自ら考えた目標達成に向けて行動できるよう、その環境づくりを全職員が担った。

4 成果と課題

< 成果 >

- ・生徒との対話の機会を充実させることで、学級や学年、学校全体におけるグループ活動や話し合い等の協働的に行動する活動へ積極的に参加する生徒が多く見られるようになった。
- ・それぞれの生徒が自分の役割を果たすとともに、互いに助け合う中で、各種行事等では学級や学年で団結して目標に向かう姿勢が目立った。
- ・例えば生徒総会においてはよりよい委員会活動に向けて、生徒同士で厳しい意見を提案しあった。今年度は新たに全国の高校生との交流活動を行った。いずれも妥協せず、活動をより充実させ学校生活を改善しようとする姿勢が見られた。

< 課題 >

- ・特にホームルーム活動の時間について、年度初めの4～5月に十分な時間を確保できていない現状がある。学校全体で行事の精選と計画的な配置に取り組むことが必要と思われる。
- ・今後も学校の教育活動全体を通じて生徒個々に応じた粘り強い指導が必要と考えられる。

図 書 部

1 目 標

読書活動を通して読解力・表現力を高め、図書や資料を学習に生かす生徒の育成

2 重点事項

- (1) 調べ学習に資する書籍（資料）の充実
- (2) 利用しやすい図書室の環境づくり
- (3) 図書に関する生徒への効果的な情報発信
- (4) 図書委員による活動の充実

3 今年度の実践

- (1) 年間を通して、職員や生徒から希望図書を募った。
- (2) 調べ学習や読書に適した環境の成立を目指し工夫した。
- (3) 図書室入り口付近に新着図書コーナーを設置し、利用者の興味を促した。また、新1年生に対して図書室の利用に関するオリエンテーションを実施し、利用方法の周知に努めた。
- (4) 毎日の貸し出し業務や図書の整理のほかに、図書の受入業務を担うことで図書委員としての知識・技能の向上に努めた。

4 成果と課題

<成果>

図書委員一人ひとりが責任をもって日々の係活動を行うことで、図書室の利用者が例年に比べ増加した。昼休みと放課後のカウンター当番に加え、図書の整理など図書室内の整備にも尽力してくれ、利用しやすい環境を調べてくれた。また、今年度は生徒に積極的に希望図書を募ることで図書の購入も速やかに行われ、生徒にとって「読みたいときに読みたい本がある」といった、魅力ある図書室に近づけたのではないかなと思う。特に新着図書の受入作業を図書委員が精力的に行ってくれたことで、新着図書の貸し出しがスムーズにできたと感じている。来年度は委員の縦の繋がりを強いものとし、上級生が下級生に作業手順を教える仕組みを確立していくことで、更なる充実した図書室の拡充を図っていきたいと考えている。

<課題>

今年度は新刊の受入作業を実践させることができたことで、知識・技術だけでなく、図書委員としての意識も向上したように感じる。そのため、一般生徒のニーズにあった図書の選定作業にも力が入り、結果、ライトノベルが中心の選書となってしまった。また、郷土学の調べ学習も、タブレット導入後はほとんどインターネットに頼るようになってしまい、調べ学習の中心となるはずの図書室の意義も薄れてしまった。「学校図書館活性化支援」における学校訪問でも指摘されたが、地域の学校として、地域の情報発信となる本をどのように生徒に提示し、還元していくか。今後の大きな課題である。まずはノンフィクションのジャンルを生徒に上手に勧め、興味をもってもらうことから始めたい。様々な本に触れることで、生徒の人生が豊かなものとなることを目指していこうと考えている。

情 報 部

1 目 標

- (1) I C Tを活用した授業の定着のために情報機器活用の利便性を高める。
- (2) 校務処理と情報発信を効率的に行うための情報機器の管理を行う。

2 重点事項

- (1) 学校ホームページの運用と管理を行う。
- (2) 情報科室や各種 I C T機器の使用規程の周知徹底をはかる。
- (3) 各種 I C T機器の有効活用を促進しながら、情報モラルの定着をはかる。
- (4) 校務用設備の点検・管理を行う。

3 今年度の実践

- (1) 昨年度に引き続き積極的にホームページを各分掌と連携して作成し、校内の様子を外部に向けて発信した。特に学校行事や学習活動、部活動の様子等は随時更新した。また、今年度から実践記録集や生活の心得、月別行事予定等もホームページ上に公開した。
- (2) 緊急メールシステムのユーザ管理を行い、未登録者への登録の呼びかけを総務部や各学年部と連携して行った。
- (3) 情報科室利用簿を作成し、管理した。また電子黒板やプロジェクタ、各種ケーブル等の所在と配置の管理を徹底した。
- (4) 情報科と連携し、授業を通じて情報モラル向上の呼びかけを行った。
- (5) 各種 I C T機器や生徒用タブレットの使用に関するガイダンスを行った。また、成績処理システムの改善を担当業者と連絡を取り合いながら随時行った。

4 成果と課題

<成果>

ホームページへのアクセス数は令和4年度と比較して2倍以上になった。積極的な更新に協力していただいた各分掌の先生方に感謝している。さらに、成績処理システムを改善し、新しい評価方法に対応した項目を拡大した。I C T機器は本格的に導入して2年目となり、学校行事・授業・ビデオ会議・オンライン研修など、生徒、教員ともに昨年以上に活用する場面が増えた。また、タブレットを活用し、職員会議や授業アンケートなどのペーパーレス化を行った。

<課題>

I C T機器の使用頻度が上がったためか、特に生徒用タブレットの破損や不具合が増加した。使用の際の注意喚起をしていきたい。また、昨年度に引き続き成績処理システムの不具合が多発し、その都度業者に対応をお願いした。今後、根本的な対策を関係する分掌と協議する必要がある。ホームページは全体的には更新頻度があがったものの、更新が少ない部門もある。今後も全体に積極的な更新を呼びかけていきたい。

保 健 部

1 目 標

自他の生命を尊重し、心と体を健康に育む生徒の育成

2 重点事項

- (1) 保健指導，健康教育の充実
- (2) 相談活動の充実
- (3) 安全管理，清掃指導の徹底

3 今年度の実践

(1) 保健指導，健康教育の充実

- ① 性教育講座（全学年）と薬物乱用防止教室（全学年）を実施した。
- ② 定期健康診断を実施した。結果を通知し，必要な生徒に受診を勧めた。
- ③ 生徒保健委員会による，環境衛生活動（クリーナー清掃、ハンドソープの詰め替え等）を常時行っている。今年度の学院祭からは救護係や飲食会場の消毒にも取り組んだ。
- ④ クラス対抗，修学旅行などの各種行事実施の保健衛生管理に協力した。
- ⑤ 中高合同学校保健委員会では，保健関係の活動状況を報告し，生徒と家庭，学校で共通した健康課題の意識をもつことができるように努めた。

(2) 相談活動の充実

- ① 保健室来室の多い生徒には，丁寧に話を聞き，背景や要因を把握するように努めた。相談しやすい環境を整備するとともに，関係職員と共通理解を図り，早期対応に努めた。
- ② スクールカウンセラーへの相談希望者には速やかに面談につなげ，保護者利用も促し，家庭と学校のつながりも大切にしている。
- ③ 教育相談検査（QU 検査）を継続実施し，よりよい集団としての学年学級作りに努めた。

(3) 安全管理，清掃指導の徹底

- ① 行事など事前の大掃除を実施した。PTA の清掃活動に参加協力した。
- ② 清掃用具の点検を行い，生徒と教職員が使いやすいように環境を整備した。

4 成果と課題

< 成果 >

学校薬剤師や外部講師職員を招くことで，より専門的な立場からの講話を聞くことができ、自身の健康を守ることにについて改めて考える機会となった。相談活動については，生徒対応に加えてスクールカウンセラーが面談することで生徒への支援に厚さが増している。

< 課題 >

保健室を来室した生徒は約 1000 件であった。睡眠不足が疑われる場合も多く，規則正しい生活リズムを意識する必要があると考える。また，不安や悩みによる体調不良の場合もあり、外科・内科・その他の区別が難しい。生徒ひとりひとりに合わせて対応していきたい。

1 年 部

1 目 標

生徒一人一人を大切にし、生徒の個性の伸長をはかる

2 重点事項

- (1) 朝学習の実施・個に応じた学習指導の実施
- (2) 面談活動の重点化～担任・主任・三者面談の実施～
- (3) 日常的な生活指導の徹底
- (4) 保護者への情報発信，分掌や教科，他学年との連携の推進

3 今年度の実践

(1)朝学習の実施・個に応じた学習指導の実施

- ① 朝学習は曜日ごとに教科を決めて実施した。実施内容は授業の補助的要素，または一般常識の補填といったものとし，提出したものは定期考査の範囲や平常点にも組み入れた。
- ② スタディーサポート（ベネッセ）を4月，8月に実施し，個々の生徒の知識・技能の定着と行動・態度の確認を図り，細かな生徒理解と日常の適切な指導の一助とした。
- ③ 年3回（7月，11月，1月）のベネッセ総合学力テストを全員受験とし，結果を全職員で共有。個々の学習事項の定着を確認するとともに，教科指導へのフィードバックによる授業改善で生徒の教科弱点の克服に努めた。
- ④ 夏季休業および冬季休業中に全員を対象とした講座を実施し，長期休みにおける学習への取り組みについての意識付けを行った。また，進学希望者に対しては全統模試対策の講座も実施。模試に対する意識の涵養を図った。
- ⑤ 定期考査で注意点を取った生徒には，次回の定期考査1週間前からの放課後学習会への参加を促し，学習習慣の確立を図った。また，成績下位者向けの講座も開催し，弱点克服のための場とした。
- ⑤ 前期，後期終業式や長期休業前に学年集会を行い，生徒にとって必要な情報を全体に示すことで，学年生徒全員が統一感をもって物事に取り組めるようにした。また，全員参加の業者による進路ガイダンスや企業見学も，進路への意識付けとしては最適だった。

(2) 面談活動の重点化～担任・主任・三者面談の実施～

- ① NOLTY 手帳の記入・提出や「MONTHLY CHECK」の実施を定期的に行った。気になる生徒を中心に担任が面談を行い，学年で情報を共有した。
- ② 夏季休業中に三者面談を実施し，進路希望やコース・科目選択，学校生活について保護者と情報を共有。知り得た情報は職員間で共有し，個々の指導へと繋げた。
- ③ 学年主任面談を行い，進路志望や学校生活などについて聞いた。情報は職員間で共有し，生徒理解の一助とした。

(3) 日常的な生活指導の徹底

朝の遅刻指導，休み時間等の巡視における整容あり方やスマートフォンおよびタブレットの用い方，公共物の使い方について適宜指導を行った。

(4) 保護者への情報発信，分掌や教科，他学年との連携の推進

- ① 年間行事予定および毎月の行事予定を配付することによって，生徒や家庭が見通しをもって学校行事へ取り組むとともに，学校経営や学年経営への理解と協力が深まった。

- ② 4月，7月に学年PTAを開催した。早い時期にPTAを行うことで，学校への関心が薄れず，以後の活動においても良好な関係を築くことができた。PTA後の担任との個人面談も情報共有のよい場となった。
- ③ 学年の共有フォルダにおいて掲示板を設け，生徒について学年職員に知っておいてほしい事柄を記入できるようにした。生徒情報を周知徹底することで，より細やかな指導が可能となった。
- ④ 養護教諭を始めとして教科担任や生徒指導部など，生徒に関わる職員の中で情報の共有を密にして，日々連携を取りながら指導に当たった。個々の職員の指導の仕方を互いに確認することで，矛盾のない指導に近づけたと感じる。

4 成果と課題

<成果>

様々な生徒が在籍していて対応に苦慮した点もあったが，各担任の細やかな指導によるクラス経営が功を奏し，特に問題となることもなく一年を終わることができた。また，養護教諭や教科担任の生徒への働きかけが生徒の心の拠り所となっている部分も多く，改めて職員間の情報の共有，指導に対する共通理解の大切さを知った。保護者対応においても，学年に限らず全職員が常に丁寧に対応してくれたことで，少しずつではあるが信頼関係を築いていくことができたと考えている。今後はこの良好な関係のもと，より生徒の能力を伸ばすことのできる環境を作り，生徒の進路実現に向けて尽力していきたい。

<課題>

多様な進路をもつ集団において，どのような指導を行うことが効果的なのが問題である。全ての生徒の進路実現を目標としているものの，学年の職員だけでは時間と人手が不足していることは明白である。他学年の職員とも連携しつつ，何とか充実した進路環境を調えていきたい。

また，生徒指導においては何と言ってもやはりスマートフォンの使用についてである。講座の開催や日々の注意喚起等も空しく，スマートフォンを使用した生徒指導上の案件は後を絶たない。スマートフォンの使用の仕方について，今一度，生徒に考えさせる場を設け，よりよい使い方をともに模索していけたらと考えている。



<就職支援講座>



<調理実習>

2 年 部

1 目 標

生徒一人ひとりを大切にし、自ら考え行動できる生徒を育成する

2 重点事項

- (1) 学習習慣を定着させ、学力の向上を図るとともに、個に応じた学習指導により進路志望の早期決定を目指す。
- (2) 日々の対話や面談活動により、生徒理解に努める。
- (3) 学校行事や生徒会活動、学外での活動を通して、社会性、協調性を高める
- (4) 保護者や関係職員との連携を密にし、学年経営への理解と協力を求める。

3 今年度の実践

- (1) 学習習慣の定着・学力の向上・個に応じた学習指導
 - ① 基礎的な学力と学習習慣の定着のため朝学習を実施した。国・数・英の基礎的な事項の問題プリントを配付し、内容をチェック後、生徒に返却した。後半からはベネッセのClassiを活用したタブレットによる学習や、共通テスト対策として情報も新たに実施した。またノルティ手帳を活用して自分の学習状況を確認させ自己管理能力を高めさせた。
 - ② 成績上位層及び進学希望生徒の学力向上を目指し、放課後や長期休業中に受験や模擬試験を意識した講座を実施した。
 - ③ 基礎学力の定着が必要な生徒には、定期考査前に学習会を開き、各科目でも個別指導を行った。
 - ④ 学年集会を適宜実施し、学習への意欲の喚起を図った。LHRを活用した進路学習だけでなく、7月と9月に進路講演会（9月は保護者も対象）、12月に進路ガイダンス、3月に進路別学習会を実施し、外部講師の協力を得ながら適切な情報を与え、具体的な進路目標の設定の一助となるよう働きかけた。さらに、インターンシップやオープンキャンパス、高大連携事業などに積極的に参加させ、視野を広げさせた。
- (2) 対話や面談による生徒理解
 - ① 面談を進路希望調査の結果や模擬試験の返却と連動させて実施し、学年で情報を共有した。また、期間以外でも必要に応じて担任だけでなく学年主任も面談を実施した。
4～5月（担任）：進級後の生活、学習目標などについて
7～8月（三者）：進路志望と学校生活について
12～1月（担任）：進路志望と来年度の科目選択の確認について
 - ② 第3回定期考査前に進路指導主事による講話を行い、日頃の学習の大切さについて改めて共有した。
 - ③ 志望理由や自己PRの文章をタブレットで入力させ、業者による添削を経て学年部職員で分担してフィードバック指導を行った。
 - ④ 担任・学年主任間で数回生徒の進路目標の状況を確認し、今後の指導について学年部会で検討した。
- (3) 諸活動を通じた社会性、協調性の育成
 - ① 授業中や朝の遅刻指導、昼休みや放課後の巡視等において、整容やスマートフォン等の扱

い、公共物の使い方について継続して指導した。

- ② ロッカーに鍵をかけさせる等、校内の生活において貴重品の自己管理を徹底させた。
 - ③ My バトンノート等を活用し、行事等の振り返りをその都度行った。
 - ④ 修学旅行での班別行動の計画を生徒主体で行った。また、各クラスの修学旅行委員が企画し、旅行中に各クラスでレクリエーションも行った。
- (4) 保護者や関係職員との連携
- ① 学年通信を発行し、行事予定を含め学校や学年の情報、進路に関する情報を発信して保護者の学年経営への理解と協力を求めた。
 - ② 学年PTAを4月と9月に実施し、学習状況や進路、修学旅行について情報を提供した。
 - ③ 各分掌主任、他学年主任と連携し、学年の円滑な運営を目指した。
 - ④ 各教科担任から寄せられた生徒の学習状況、生活状況に関する情報を学年部で共有し、生徒理解を深めながら、改善すべきことは迅速に対応をしてきた。

4 成果と課題

< 成果 >

- (1) 担任を中心に丁寧な指導を重ねてきたおかげで、主体的に学習に取り組む生徒が増えてきた。教科担任に進んで質問しに行く姿や、お互いに教え合う様子がたびたび見られるようになってきた。担任や保護者との面談、進路ガイダンス等により進路目標が具体的に固まりつつある。
- (2) コロナ禍を乗り越え、校外での活動（オープンキャンパス・高大連携授業・各種ボランティア活動等）に積極的に参加する生徒が多く見られた。また、学院祭を始め他の学校行事や修学旅行を通して、学年全体の絆を深めることができた。
- (3) 郷土学や表現科では上位学年としてリーダーシップを発揮する生徒が多く見られた。
ICT機器を積極的に活用し、学びを自らの志望につなげて探究するなど進路への意識が高まっていくのを感じた。

< 課題 >

- (1) 新教育課程に移行した最初の学年として、教育課程や観点別評価のあり方、共通テストの変化等これまでと異なる点が多く、理解するのに苦労している。変化の激しい時代に適応しながら、適切に情報を収集し、弾力的な指導が求められていると感じている。
- (2) 提出物の期限を守ることや朝学習を時間通りに実施するなど、昨年度から抱えていた課題を改善することは容易ではなかったが、わずかでも改善傾向が見られている。来年度も粘り強く指導を重ねていきたい。
- (3) 基本的な生活習慣の確立や日々の体調管理に苦労している生徒が少なからずいる。家庭、養護教諭と連携を図り、欠席や欠課を少しでも減らすよう努めていきたい。
- (4) 大学進学希望の生徒に対しては、さらに学力を伸ばすための対策が必要である。授業での指導だけでなく、放課後や長期休業中の講座、添削指導等で各教科と連携をとりながら学力を伸ばし、個々の生徒の実態に応じて入試に対応できる能力を育成していきたい。

3 年 部

1 目標

進路実現に向けて志を高くもち、主体的に物事に取り組む態度の育成と協調性を養い、社会に出ていくために必要な資質を身につけさせる。

2 重点事項

- (1) 学習習慣を定着させ、学力の向上を図るとともに、個に応じた指導により進路志望の達成を目指す。
- (2) 日々の対話や面談活動により、生徒理解に努める。
- (3) 学校行事や生徒会活動、学外での活動を通して、社会性、協調性を高める。
- (4) 保護者や関係職員との連携を密にし、学年経営への理解と協力を求める。

3 今年度の実践

(1) 朝学習の実施・個に応じた学習指導の実施

- ①学習習慣の定着と基礎学力の確認のために、国語・数学・英語を中心として朝学習を実施した。また、ノルティ手帳を活用し、自己管理能力を高めさせた。
- ②進学希望生徒を対象に放課後や長期休業中に講座を実施し、希望生徒に対しては添削指導を行った。また進路指導部と連携し、総合型や学校推薦型入試、就職試験対策として面接指導・小論文指導を行った。
- ④成績下位層の生徒への対応として、学年部で個別指導にあたった。
- ⑤上記の重点事項遂行のため、学年集会を適宜実施し、呼びかけを行った。また、進学説明会やオープンキャンパスへの参加などの進路活動を通して、進路意識を高めさせた。

(2) 定期的な面談の実施（積極的な面談活動を通じた生徒理解）

→面談で得られた生徒の進路目標などの状況は学年部で共有

- ①4月（担任）：新クラスでの生活や学習目標、進路志望などについて確認
- ②7～8月（三者面談）：進路志望について確認（就職・進学）以降、随時実施（担任・三者面談）

(3) 諸活動を通じた社会性や協調性の醸成

- ①基本的生活習慣や規範意識を培うよう指導した（挨拶、整容、言葉遣いなど）。また、学校行事や生徒会活動では、最高学年として、社会性や自主性、協調性などをより一層高める機会と捉え、生徒主体での活動を支援するよう心掛けた。
- ②HRや学年集会、授業中や朝の遅刻指導、放課後の巡視等において、整容や携帯電話等の扱い、タブレットなどの公共物の使い方について指導した。
- ③ロッカーに鍵をかけさせ、自己管理能力を高めさせた。
- ④オープンスペースやベンチなど、公共スペースの使い方について指導を徹底した。

(4) 保護者への情報発信、分掌や教科、他学年との連携の推進

- ①学年通信や進路通信、学級通信を通じて、学校や学年の情報（行事予定等）、進路に関する情報を発信し、保護者の学年経営・クラス経営への理解と協力を求めた。
- ②各教科担任からの生徒の学習状況、生活状況についての情報を学年部で共有した。

③他学年や関係分掌と連携や情報交換を適宜行い、生徒理解を深めた。

4 成果と課題

＜成果＞

- (1) 進路指導に関して、少人数のよさを活かして、生徒一人ひとりの進路希望を丁寧に把握し、それに応じた指導をすることができた。
- (2) 学年部職員での協力体制が整っており、教科指導、進路指導、生徒指導などにおいてきめ細かい指導をすることができた。
- (3) 1・2年次に実施したスケッチブックオリエンテーションや3年次の研究論文を、進学や就職の面接練習や志望理由書に活用することができた。
- (4) 放課後や長期休業中の講座に粘り強く参加した生徒が進路希望を達成することができた。

＜課題＞

- (1) 生徒の進路希望が就職、専門学校（看護系含む）、短大（総合型・推薦・一般）、私立大（総合型・推薦・一般）、国公立大（総合型・学校推薦型・一般）と多岐にわたるため、丁寧な進路指導（出願書類作成の指導や点検、小論文・面接指導を含む）を行うためには担任や学年部の負担が大きい。特に8月～10月は多くの進路希望に関する準備や出願が集中するため、書類の点検などには細心の注意が必要であった。進路指導部に協力していただき、全職員に対して面接・小論文等の個別指導のお願いをさせていただいているが、生徒数が多い次年度以降は、今年度以上の対策が必要だと思う。
- (2) 国公立大の学校推薦型選抜や総合型選抜の出願に関して、志望理由書やプレゼンテーション資料等を作成することにかかなりの時間がかかることや、入試の時期に定期考査があることなどを事前に生徒（保護者）に周知させる必要があった。
- (3) 進路決定者に対する第3回定期考査後の授業の在り方が難しかった。

III 進路指導

進路指導部

1 目 標

志を掲げ、進路目標の実現に向けて日々努力する持続力と、確かな学力の育成を目指す

2 重点事項

- (1) 明確な進路目標の早期設定と学力の向上
- (2) 3年間を見通した進路指導計画と実践
- (3) 一人ひとりに対応した進路指導の充実
- (4) 自己管理力の向上
- (5) 多様な入試形態への対応

3 今年度の実践

(1) 明確な進路目標の早期設定と学力の向上

① 進路希望調査にもとづいた面談の実施

進路希望調査（年2回）に加え、次年度の文理選択や科目選択に関する調査など様々な機会を捉えて、生徒との面談を実施し進路希望の把握や助言を行った。

② 進路学習の拡充

1年生では企業見学（TDK本荘工場、プレステージインターナショナル）、大学見学（秋田県立大学）、スケッチブックプレゼン（大学研究）、2年生ではインターンシップ（就職希望者）、進路別ガイダンスといった企画を通じて、生徒一人一人の進路意識の確立を図った。

③ 放課後講座、長期休業中の講座等

基礎学力の定着と応用力の育成を目指し、1・2年生では、国・数・英の3教科を中心とした放課後講座を実施した。3年生は、5教科で共通テスト対策講座、個別試験対策講座を実施し、受験に対応できる応用力の育成に努めた。

④ 応募前職場見学の実施

民間就職希望の3年生には、求人票の条件だけで判断するのではなく、実際に職場の雰囲気や自分の目で確かめてから応募することを徹底した。また、保護者と何度も連絡を取り、家庭と連携しての進路実現を目指した。

(2) 3年間を見通した進路指導計画と実践

① 『進路の手引き』の発行

3年間の進路計画の流れを生徒自身に具体的にイメージさせるとともに、家庭で保護者と進路について話し合い、計画を立てる際の指針となるように作成した。卒業生の合格体験記を載せることにより、具体的な学習方法や進路の選び方を提示したほか、大学入学共通テストの導入に伴う変更点なども新たに掲載し、最新情報を網羅するよう心がけた。

② 進路説明会の実施

今年度も外部講師を招いての進路講演会（1、2年生対象）を開催し、学習意欲の喚起を図った。また、2年生に対する分野別進路説明会を12月に実施し、秋田県内及び近県の大学、短大、専門学校の担当者から対面で話を聞く機会を設けた。遠隔地の

大学等とはオンラインで面談させるなど、生徒一人一人の具体的な進路希望に合わせた説明会になった。さらに2年生3月に進路学習会を企画し、大学・短大進学、専門学校進学、就職の3分野に分かれて外部講師による講話を実施している。保護者向けの講演では、9月には2年生保護者向け進学講演会(マネープラン)を開催。大学(短大含む)進学と専門学校進学で、それぞれの特長や費用について外部講師による講演を行った。

(3) 一人ひとりに対応した進路指導の充実

① こまめな志望検討会の実施

学年部会等の機会に、各担任から気になる生徒について報告してもらい、希望する進路の妥当性や実現可能性、成績状況について検討を行った。スタディサポートや学習状況調査の結果などもこの際に活用した。また、2年部では3月にベネッセの担当者を招き、直近の模擬試験結果の分析について直接話を聞く機会を設けた。

② 個別添削指導の充実

総合型選抜・推学校推薦型選抜に挑戦する生徒の面接指導や小論文・作文対策として、全教員で指導にあたるよう計画した。前任校を含むこれまでの経験や教科の専門性、教員本人の希望などをもとに担当分野を振り分け、希望する生徒の指導を行った。

③ キャリア教育との連携

CAN-DOリスト(キャリア教育を通じて育む資質能力であるキャリア形成能力課題解決能力・自己調整能力・対人関係能力がどの程度身に付いているのか、全23項目による本校独自のチェックリスト)に基づく調査を年2回実施し生徒がどの程度変容できているかを測った。

(4) 自己管理力の向上

① 手帳の活用

NOLTY手帳を活用し、学習習慣の確立と自己のスケジュール管理力の向上を目指した。また、こまめに記録をとることで自己の行動の振り返りや内省の機会とさせた。週に1回提出させ担任がチェックすることで、生徒の細かな変化も早期に気づき対処する事を目指しているが、生徒在籍数が回復傾向にあり、特に次年度1年生では担任の負担も大きくなることが容易に想像できる。そのためため副担任、共通担任等も加わって全体で指導するなど工夫が必要である。

② 学習時間調査

学習強調週間および学習パワーアップシート記入に合わせて、定期考査ごとに学習時間を調査することにより、学習時間確保の重要性を生徒に意識させるとともに実態の把握に努めた。

(5) 多様な入試形態への対応

① 教員の意識改革

模擬試験のデータをもとに県内各高校や東北6県の高校進路状況を職員間で共有し、最新の動向をもとに本校の進路指導について考察した。さらに、秋田県12高校進学指導研究会にオブザーバー校として参加し、他校進路指導担当教員と情報交換を行った。

② 授業改善

考査の出題を変えることで、自ずと授業の進め方、指導事項、発問も変わり授業改善に繋がると考え、共通テスト(試行調査含む)の出題内容を参考に、各教科において定期考査での出題を工夫することなどを提言した。

③ 職員研修の実施

今年度 classi を試験的に導入したが、具体的な活用法について進路指導部として示唆できず、なかなか使いこなすことができなかった。そこで年度後半ではあったが校内研修を実施し、問題配信や生徒の取り組み状況の確認の方法等について学んだ。

4 成果と課題

<成果>

① 多様な入試形態・進路希望への対応

総合型選抜、学校推薦型選抜の比重が年々高まっている。受験生側も共通テスト問題量の増加、新年度からの情報Ⅰ導入に伴う負担回避など、保護者の意向も含めて早期に進路決定を望む傾向がある。一方で地方国公立大学には少子化の影響により、学科の定員を充足できないという危機感があり、総合型や学校推薦型である程度学生を確保したいという思惑がある。このような要素が相まって、今年度は大幅に国公立大学合格者数を伸ばすことができた。(表①参照)さらに、県外の国公立大学を受験する生徒も着実に増加している。

(表①)

令和6年3月22日現在

卒業年度	卒業生数	国公立大学合格者数	割合(%)	備考
令和3年	40	7	17.5	県外2
令和4年	59	7	11.9	県外1
令和5年	56	12	21.4	県外3

また、大学進学以外の進路希望にもきめ細かに対応し、短期大学・専門学校進学希望者、就職希望者については、ほぼ全員の希望進路を実現することができた。(表②参照)

短期大学出願・合否状況				(表②)				令和6年3月22日現在							
受験型	総合型		指定校		公募		スポーツ等		一般共テ利用		一般		合格		
	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格	計		
合計	1	1	1	1	0	0			1	1	4	3	6		
合格率	100.0%		100.0%						100.0%		75.0%				
各種学校出願・合否状況				令和6年3月22日現在											
受験型	総合型・A O		指定校		公募		特別推薦				一般		合格		
	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格			出願	合格	計		
合計	6	6	1	1	4	3	1	1			4	3	14		
合格率	100.0%		100.0%		75.0%		100.0%				75.0%				
就職応募・内定状況				令和6年3月22日現在											
応募先	公務員		民間（県内）		民間（県外）								合格		
	応募	採用	応募	内定	応募	内定							計		
合計	5	3	5	5	0	0							8		
採用・内定率	60.0%		100.0%												

< 課題 >

① 低学力層への対応

連携型移行完了2年目であるが、前年度に続き入学時の学力が低い生徒の層が厚くなっている。同時に、上位層にあたるB段階以上の人数は大きく変わっていないことが見て取れる。しかし、1月の模試結果では、令和3年度以降B段階以上の人数が減少している。(表③参照)つまり、高校入学後上位層を伸ばし切れていないということである。

(表③) ベネッセ スタディサポート 1学年 4月 過年度比較												
設置区分		連携型								併設型		
年度		令和5年度		令和4年度		令和3年度		令和2年度		令和1年度		平成30年度
GTZ 段階	S	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(2.3)	0 (0.0)
	A	1	(1.5)	2	(3.0)	0	(0.0)	2	(3.3)	4	(9.3)	8 (21.1)
	B	20	(29.4)	21	(31.3)	20	(32.3)	25	(41.7)	10	(23.3)	11 (28.9)
	C	23	(33.8)	21	(31.3)	24	(38.7)	23	(38.3)	18	(41.9)	13 (34.2)
	D	24	(35.3)	23	(34.3)	18	(29.0)	10	(16.7)	10	(23.3)	6 (15.8)
人数 (%)		68		67		62		60		43		38

ベネッセ 進研模試 1学年 1月 過年度比較												
設置区分		連携型								併設型		
年度		令和5年度		令和4年度		令和3年度		令和2年度		令和1年度		平成30年度
GTZ 段階	S	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(2.4)	1 (2.7)
	A	1	(1.5)	1	(1.5)	0	(0.0)	3	(5.1)	6	(14.3)	6 (16.2)
	B	19	(28.8)	19	(29.2)	17	(30.4)	24	(40.7)	13	(31.0)	15 (40.5)
	C	19	(28.8)	22	(33.8)	23	(41.1)	21	(35.6)	18	(42.9)	5 (13.5)
	D	27	(40.9)	23	(35.4)	16	(28.6)	11	(18.6)	4	(9.5)	10 (27.0)
人数 (%)		66		65		56		59		42		37

要因の究明には様々な観点からの分析が必要だが、入学者の増加とともに、これまで可能だった少人数指導による生徒一人一人の手厚いケアがしづらくなっていることは確かだろう。今後さらに生徒数が増加した場合、教員数や教室数の制約から、習熟度別の授業展開などは一層困難になると思われる。本校の最重点課題として学力向上に取り組むにあたり、ICTの活用など教員個々の負担を軽減しつつ最大限の効果が得られるよう工夫が必要である。

② 進路スケジュールの大幅な見直し

大学進学では、総合型選抜・学校推薦型選抜から狙っていくのが主流になりつつある。本校でも大学合格者延べ28名中、21名が上記選抜方式による合格となっている。(表④参照)早い大学では9月から願書の受付が始まるため、それまでに準備を整えておかねばならない。その他に、本番の試験対策として面接(口頭試問含む)練習、プレゼン資料作成、小論文添削などがあり、「部活動を引退してから」や「3年生最後の学校祭が終わってから」では間に合わない。1月の共通テストを見据えた学力向上対策と、9～11月の総合型・学校推薦型選抜対策を両立させるためには、従来の進路指導スケジュールでは難しい。部活動や学校行事のあり方も含めて再検討すべきではないだろうか。

国公立大学出願・合否状況				(表④)				令和6年3月22日現在					
学科	総合型		共テ無		共テ有		前期		後期		中期・独自		合格 計
	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格	
合計	5	2	8	5	9	2	8	1	4	1	3	1	11
合格率	40.0%		62.5%		22.2%		12.5%		25.0%		33.3%		
私立大学出願・合否状況				令和6年3月22日現在									
学科	総合型		指定校		公募		スポーツ等		一般共テ利用		一般		合格 計
	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格	出願	合格	
合計	7	5	4	4	4	3	0	0	7	3	12	2	17
合格率	71.4%		100.0%		75.0%				42.9%		16.7%		